
普通でありたい過負荷な異常者

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通でありたい過負荷な異常者

【Nコード】

N1448Z

【作者名】

Fe

【あらすじ】

『普通でありたい』と願う少年は箱庭学園へと入学する。しかし、彼は異常であり過負荷である。彼のこれからの学園生活はどうなるのか！？（作者文才のセンスは1ミリもありません）

プロローグ（前書き）

初投稿のせいか駄文です…

生暖かく見守ってください。

プロローグ

とある学校のグラウンド
で多くの学生が倒れている中、その中心に一人の少年が立っていた。
その少年の手からポタポタと真っ赤な血が下へと落ちていく。

少年の名は『桜島紅葉』さくらじまこうよう。

幼少の頃にある事をきっかけに孤独な生活を送っていた。家族に見捨てられ研究所で実験動物または玩具のような扱いを受けてきたのだ。

そんな中一人研究所から抜け出し今まで生きてきた。頼れる人物もいない紅葉は

一人孤独に暮らしていた。

「またか…。」

ポツリと誰にも聞こえないような声の大きさを紅葉は言葉を漏らした。

『普通でありたい』

それが今の紅葉の最も欲しているものだった。しかし、今の紅葉は毎日喧嘩を吹っ掛けられては相手をボコボコにする日々が続いた。

金や地位や名

誉なんていらぬ。ただ、普通でありたい。

「これは中々興味深いですね。」

その声の方向へ振り向くと、一人の老人が紅葉に向かって歩いて来ている。

「誰だアンタ？」

「私は箱庭学園の理事長をしている不知火袴といいます。」

そう言い紅葉の顔を見ると満面の笑みとなった。

「「桜島君には

とても素晴らしい才能があります。とても興味深い。」

「何故俺の名前を知っている？」

そう言うと紅葉は少し殺気を放ちながら言い放った。

「まあまあ、そう身構えずに、…実は君に提案がありましたね。」

その言葉に不思議に思いながらも、とりあえず聞いてみる事にした。

「単刀直入に言います、箱庭学園に来ていただけませんか？あなたの才能を潰す訳にはいきません。」

「…」

その言葉に少し戸惑いを覚えた。しかし、同時にわずかな喜びが浮きでできた。何せ紅葉は、人に興味を持ってもらえるのは久しぶりなのだから。

「…良いだろう。」

「そうですか！では早速ですg」ただし条件がある「…何でしょうか？」

紅葉は袴の目をしっかりと捉えこつ言った。

「普通でいられる事、これが条件だ。」

プロローグ（後書き）

初投稿キンチョーしました（笑）

次回は主人公紹介でもしていきます。

主人公紹介（前書き）

設定がすごく長くなりました。

設定作るのがって疲れますね（、；、）

主人公紹介

【名前】

桜島紅葉 さくらじまこうじ

【性別】

男

【容姿】

赤髪で髪を下に下ろしている。（禁書の垣根帝督のような感じ）
目が死んでいて、制服は胸元を開けている。
顔は中の上で善吉より少し背が高いぐらい。

【性格】

普段は大人しい（？）が、自分の邪魔をされると男女問わず容赦無しになる。

面白い事は善悪問わず好きである。

普段から普通の学生として生きてこなかったせいか、的外れな言動が多くいわゆる天然である。

【異常】

『オーガ
暴鬼』

身体能力の超強化や身体全体の硬質化の能力。

身体能力はめだかの乱神モードを軽く凌駕し、例えばどんな攻撃を受けても無傷でいられる皮膚を持つ。

【過負荷】

『マイ・ワールド
素晴らしき世界』

自分を対象にする相手の異常や過負荷を無効化する。これによつて多磨川の『却本作り（ブックメーカー）』や志布志の『致死武器^{デッド}』による精神的ダメージも無効化出来る。
また、めだかの『完成^{ジ・エンド}』でもコピー出来ないようになってい
る。

【過去】

生まれて数ヶ月で読み書きをマスターし、両親も最初は我が子の天才ぶりを喜んでいたが次第に気味悪がる。

結果、研究所に売り渡され実験動物のような扱いをされる。

（この影響で過負荷が発生する）

これと同時に幼少の頃のめだか達と接触しており、人生についてめだかに説き興味を持たれる。

度重なる実験への恐怖や両親に対する恨みが積もり、研究所の研究員を虐殺し脱走する。

また、双子の妹がおり妹自身も異常であつたが紅葉の二の舞にならぬように嘘を演じていた。これにより、紅葉は妹の事はあまり快く思っていない。

主人公紹介（後書き）

こんな感じですかね。

次回から本編入ります！

第一話、対談（前書き）

初めてこんなに長く書いた！

第一話、対談

（紅葉 side）

「……か。」

早朝、紅葉は箱庭学園の校門の前に佇んでいた。朝早いにも関わらず多くの生徒が部活の朝練に参加し汗を流している。

『箱庭学園』

そこは1 - 4組は普通科、5・7・9組は体育科、6・8組は芸術科。それより上のクラスは全員が特待生となっており、10組は特別普通科、11組は特別体育科、12組は特別芸術科、さらに上の13組には全国から集められた異常で構成されている。
アブノーマル

そんな中、新たなスキル『過負荷』を持つ紅葉がこの箱庭学園に入学（もとい転校）して来た。

「今度こそ普通の生活が送れるハズだ。」

そう呟き校門を通りグラウンドを歩いている最中、『ゴンッ!』と頭に衝撃が走る。ふと後ろを野球の硬式ボールが落ちている。

(これが当たったのか…。)

そう思っていると遠くから走ってくる人物がいた。着ているでそれが野球部だと理解できた。

「おい!大丈夫か!?」

「ああ、心配ない。」

「心配ないって…!絶対たんこぶ出来た…ない?」

「じゃあな。」

紅葉はボールを野球部員に手渡すとサッサと生徒用玄関に足を進める。

後ろで野球部員が（。　。　）　こんな顔をしていたが気にしないで
おこつ。

（理事長室）

「待っていましたたよ桜島君。まあ、ソファーでゆっくりして下さい。」

袴がそう促すと紅葉はソファーに腰を下ろした。

「まずは御入学…まあ、転校という形ですがおめでとつございます。」

「こちらとしては条件が叶うなら何処でも良いがな。」

「ハッハッハ。そうですか。」

袴は満足そうに笑うと机に複数のサイコロを置いた。

「サイコロ？」

「ええ。桜島君良ければそのサイコロを振って頂けませんか？」

「怪しいな……。まあ良いだろう。」

そしてサイコロを握り机の上に転がす。

すると、

サイコロに亀裂が入り粉碎する。

（紅葉side out）

（袴side）

袴は目を見開き驚愕している。そう、サイコロが粉碎するのは生まれ初めて見たのである。

（まさかこれ程までとは…。やはり私の目に狂いは無かった！！）

「これで良いのか？」

「ええ。やはり君は素晴らしい才能の持ち主ですよ。」

「フンッ…。」

（彼には悪いですがあの計画の為に働いてもらいましょうか。）

そう考えた袴は紅葉にフラスコ計画のついて教えだした。

「人為的に天才を創り出す計画か…。」

「ええ、どうです？」

「愚かだな。そもそも天才と言うものは努力の積み重ねで成り立つものだ。」

「ですが桜島君は…」

「黙れ!!」

紅葉がそう叫ぶび机に向かって拳を振り落とす。すると机がいつも簡単に真つ二つとなった。

「俺は…俺は『化け物』だ…。」

そう発言した紅葉の目は元々死んだような目をしていたが、より一層目が濁っていくのが感じ取れた。

「すみマセンでした…。つい浅はかな事を言ってしまいました。」

「…いや、こちらも取り乱した。」

二人の間に長い沈黙が続いた。

「どうですか？この計画に参加して頂けませんか？」

「さっきも言った筈だ。その計画は愚かだと。」

「そうですね。残念だ。ただ、興味はある。」…はい？

「その愚かな計画が本当に成功するのか。興味が湧いた。」

「これは驚きました…。てっきり断られたかと。」

「面白そうな事は善悪問わず好きなのでな。で、どうするんだ？」

「是非参加して頂きたい！君がいれば計画も成功します！」

「分かった。よろしく頼む。」

「こちらこそ。」

二人がそう言つと互いに握手をした。

「忘れていました！実はもう十三組の十三人は満席でした。」
サ―ティン・パーティー

「心配ない。」

そう言い放つた紅葉は、邪悪な笑みを浮かばせこう言った。

『いずれ潰す』

第一話、対談（後書き）

主人公のキャラが自分でも分からん…。

新感覚ダークヒーローみたいな感じでOKにしよう。

第二話、1年1組（前書き）

前半ギャグです。

それではどうぞ！

第二話、1年1組

（袴 side）

「ふう…。」

袴は紅葉との対談を終えて一息ついていた。あの少年と話す時はどうも神経を使い過ぎてしまう。

（しかしあの最後の言葉…）

『いずれ潰す』

（あの言葉は十三組の十三人サーティン・パーティの誰かを潰し、その席をもらうつもりか？確かに彼になら可能ですね。）

「あなた達はどう思いますか？」

そう言くと袴の後ろから六人の男女がそれぞれ出てきた。

「あいつ中々面白そうな奴だったなあ。てか、あいつ俺らの事絶対気づいてるぜ？」

高千穂仕種。 3年13組所属。 血液型AB型。 験体名『ハートラッピング棘毛布』

「今僕の持っている武器で彼を殺すのは無理でしょう。戦わなくても彼の危険さが分かりましたよ。」

宗像形。 3年13組所属。 血液型AB型。 験体名『ラストカーベット枯れた樹海』

「机叩き割ったぐらいでいい気になっちゃて！今度会ったらOHANA SHIだね！」

古賀いたみ。 2年13組所属。 血液型AB型。 験体名『骨折り指切り（ベストペイン）』

「私は意見を有しない。思うことなど何もない。」

名瀬天歌。 2年13組所属。 血液型AB型。 験体名『ブラックホワイ黒い包帯』

「そんな事言ってるけど、改造してやりたいって気持ちに僕には伝わってるよ。でも、僕の『受信感度』を使っても彼の思考が読めなかったよ。」

行橋未造。 3年13組所属。 血液型A B型。 験体名『狭き門』
ラビットラビリンス

「フン！王である俺の前であの傲慢な態度が気に食わん！！」

都城王土。 3年13組所属。 血液型A B型。 験体名『創帝』
クリエイト

「ホホオ、流石が君達は彼の強さが分かっていますね。 いやはや、これからどうなるか楽しみですね。」

「それにしても良いの？彼は普通に過ごしたいんでしょう？大丈夫なのか十三組なんかに行かせて…。」

「…。」

「理事長さん？」

「たぶん大丈夫ですよ？古賀さん。 それでは今日は早退させていた

「だきます。」

「なぜ疑問系！？絶対行かせた事後悔してる！後、帰っちゃうの！？」

「あの庶民の事だ。今頃怒り狂いながらこつちに来てるだろう。」

「はあああかああまああああああああああああああああ
あああああ！！！！」

その声が聞こえたと同時に、理事長室の高級なドアが紅葉の手によってゴミクズとなった。

「ほらな。」

Side out)

紅葉 sides

クソッ！、何が普通のクラスに入れてあげようだ！

教室に入れば無駄にデカイ奴がいびき出しながら寝ていた。その事はまあ許せる。許せんのは黒板に書いてある事だ！

『永久自習』

そう、キレた訳はこの『永久自習』のせいなのである。そして、俺はあのバカ理事長ともう一度話をつけるべく、今一度理事長室に帰って来たが…。

「「「「「「…。」」「」「」「」

「ん？確かオマエらは…。」

確か俺が袴と話している時に後ろに隠れていた六人組か。

「おい。袴はどこだ？」

「理事長なら早退した。代わりにこの手紙を君に渡せと言われた。」

宗像はそう言つと手紙を紅葉に渡した。

紅葉はその手紙を読み始める。

「拝啓、桜島君。この度は、私の不手際で桜島君に不快な思いをさせてしまつてすまない。お詫びとして桜島君には1年1組に移つてもらいます。それでは、さようなら。 不知火袴より」

読み終わると辺りがシーンとなり理事長室が無音状態となる。しかし、この手紙の意味を理解した紅葉は落ち着きを取り戻した。

「邪魔したな。」

そう言つと理事長室から出て行つた。

（紅葉side out）

＼13組の面々side＼

「行っちゃまったな。」

高千穂がそう呟くと、行橋が続くように…

「嵐が通り過ぎたみたいだね…。」

「ON・OFFの切り替えが素晴らしい子だったね…。」

と、古賀が続く。

「フンッ！下らん。」

都城がそう言うとき時計台へと向かう。その他の面々もそれに時計台へと向かった。

＼13組の面々side out＼

〔善吉 side〕

全く、めだかちゃんもよくあんな事やるよ。24時間365日相談を受け付けるなんて…。俺には出来っこないよ。

「あひゃひゃ、どーしたの人吉くん？」

「不知火か。いやなに少し考え事してただけだ。」

「ふうん。そういえばさっきの黒神さんスゴかったね。全校生徒を前によくあんな言えるね。人前に立つのに、慣れてるのかな？」

「カツ、ありゃあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのになれてんだ！」

「あひゃひゃ、それもそうかもね！でも支持率98%つてのはスゴいね。」

「まあ、昔からあんな奴だったからな。もう驚きはしねえよ。」

そう、あの幼き頃に研究所で出会った、あの赤髪の少年のおかげで今のめだかちゃんがいるし俺もいる。

あの赤髪の少年は今何処で何をしているのか。出来れば会ってもう一度話したい。

「って、聞いているのぉ？人吉くうくん…。」

「おうわっ！！」

不知火のその不気味な声で善吉は現実世界に引き戻された。

「悪い聞いてなかった。で、何だった？」

「だから今から転校生が来るんだってさ。」

「転校生？どうしてまたこんな時期に。」

「さあ？」

そつやり取りしていると担任の教師が教室に入つて来た。

「お前ら席につけ。ほら、そこ女子早く座れ。」

そつ後ろを伸ばす話し方で教師は着席を促した。

「今日はお前らに良いニュースがあるぞ。何とこのクラスに転校生が来ます。じゃあ、早速紹介してもらおうぞ。」

そう言つと、教室のドアがガラガラと開く。

そこにいたのは、背が高く胸元を開けた制服を着た赤髪の生徒が入つて来た。

「桜島紅葉と言つ。一年間よろしく頼む。」

第二話、1年1組（後書き）

無駄にデカい奴の異常が効かないのは、紅葉の過負荷のおかげです。

良かったね！デカい奴！

第三話、再会（前書き）

それでは第二話でございます。

第三話、再会

〔善吉 side〕

「あつ、結構イケメン！」

「そうかあ？目死んでんだぞ。」

「そこが良いんじゃない。ミステリアスな感じで！」

そうやって周りの生徒が騒ぎますが、善吉はその話題になっている転校生を見て衝撃を受ける。

（もしかしてアイツは…。）

そう、善吉は幼少の頃に研究所で出会った赤髪の少年と転校生の少年が同じ赤髪だという事に気付く。

「じゃあ、今から質問タイムに入ります。失礼な事は聞くなよ。」

教師がそう言つと先程紅葉の事をイケメンと言い張つた女子が質問する。

「彼女っている？」

いきなりその質問かよ！てか、ストレートに聞きすぎだろ！？

「いない…。」

それに続くかのように他の生徒も次々と質問する。

「好きな食べ物？」

「基本的に全部好きだ。嫌いなものはない。」

「好きな芸能人とかいる？」

「余りテレビは見ないからどんな奴がいるか知らん。」

「何で目死んでの?」

「放つとけ...。」

どうする...。もしかしたら本当にアイツかもしれない。

いてみるか...。(

(一か八か聞

意を決して善吉が立ち上がり紅葉に質問する。

「俺の事憶えてる?」

「善吉 side out」

「紅葉 side」

「...は?」

思わずマヌケな声が出てしまった。…だが、確かに何処かで見覚えがあるな。

「ほら！まだ小さい頃に研究所で会っただろ！？」

「っ…！」

研究所、その言葉に俺は思わず顔が険しくなる。あの研究所のせいだ。俺の人生が狂いだしたのは！

「おっ、おい。どうなんだ？」

しかし、研究所で会った子供なんてあまり覚えてない…。唯一憶えてるのは待合室にいた2人だけだ。

…ん？もしかしてあの2人の子供なのか？

「もしかして待合室にいた子供か？」

「そうだよ！いやゝ久しぶりだな！？」

善吉はそう言つと席を立ち、紅葉まで歩くと手を掴み上下に振る。

「俺は人吉善吉つて名前だ。元気にしてたか？今度めだかちゃんにも会つてくれよ。きつと喜ぶよ！」

「めだかちゃん？」

ああ、あの時一緒にいた子供か。今思えばあの子には偉そうな事を言つたな…。

「あのお前のおかげで、今のめだかちゃんがいるし俺がいるんだ！」

俺のおかげ…か。俺はただ『人を幸せにする事を目的に生きたらど

うだ?』と言っただけだが。

(まあ、あの時はまだ人間のクズの部分を知らなかったからな…。)

「どうした?」

「いや何でもない。」

少し感傷的になってしまったな。

「あの。感動の再会の最中に悪いけどお、もう良いかい?」

「あつ、すいません…。」

そう教師に注意された善吉はそそくさと自分の席に戻る。

「じゃあ桜島君の席は、人吉君の隣の空いてる席ですね。」

「分かりました。」

紅葉はそう言つと自分の席へと辿り着きイスに座る。

「よろしくな。気軽に善吉って呼んでくれ！」

「あたしは不知火って言うんだ。よろしくね。」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。紅葉で構わない。」

（今までいた学校ではまずあり得ない事だな。ようやく普通に生きられるだろう…。）

そう紅葉は思い、これからの学校生活に少なからず期待をした。

だが、紅葉はまだ知らなかった。この善吉達との出会いが、紅葉の学校生活に多大な影響を及ぼすとは知らずに…。

第三話、再会（後書き）

最後がよくあるドラマみたいな感じになりました…。

能力変更について（前書き）

急で申し訳ございません。

能力変更について

能力変更する点は一つだけです。

まず、主人公の過負荷『素晴らしき世界』マイ・ワールドの発動がON・OFFを可能にしました。

理由は、安心院の『アリバイブロック腑罪証明』を無効化してしまうからです。こうしないと、安心院との絡みが難しくなるので仕方なく変更する事になりました。

また、主人公の異常や過負荷はまだ発展途上で、これからもっと成長する予定です！

もしかしたらまたこのような変更があるかもしれないので、予め忠告しておきます。

また、主人公の過負荷で主人公自身の異常が無くならないの？と、

友人に言われました。ですが、主人公自身の異常が自分の過負荷の影響で消える事はありません。

能力変更について（後書き）

改めてご迷惑おかけして申し訳ございません m () m

第四話、生徒会長（前書き）

長ったらしい文章が続いてしまった…。

文才が欲しいっス…。

第四話、生徒会長

「めだかside」

「フム、こんなものだろう。」

この度、晴れて箱庭学園第98代生徒会長となった黒神めだかは生徒会室の模様替えを終えた後だった。

「部屋はこれで良いとして、後は役員を募るだけだな。」

今の生徒会は生徒会長一人しかおらず他の役員の席は空いたままだった。

（まあ一人は善吉だと決めている。他の役員は後々増やしていけば良いだろう…。）

めだかはそう考えると生徒会室を出て1年1組へと歩いて行く。

文武両道・容姿端麗・質実剛健・才色兼備・有言実行の完璧超人と謳われている黒神めだかは、生徒会長選挙で大言壮語を放った結果、98%の支持率を得た大物人物である。

しかし、そんなめだかも幼少の頃に悩んでいた事があった。それは『人生は何を目的に生きるのか?』という事だ。

その時は人生は余り良いものではないと、少なからず思っている節があった。だが、そんな時ある少年と出会った。

その少年は赤髪でどこか不思議な雰囲気を持つ子供だった。めだかは気付いたらその少年に『人生は何を目的に生きるのか?』と質問していた。

すると、その少年は少しばかり考えた後に　　。

『人を幸せにする事を目的に生きたらどうだ?』

その言葉がどれだけ心に響き渡ったか。今のめだかがいるのはその少年のおかげである。

（あの少年には感謝してもし切れない…。）

そうめだかが一人で昔の事を思い返していると、目当ての1年1組へと到着した。

（これではいかな。気を引き締めねばならん。）

そう思い教室のドアを開けると、めだかに衝撃が走る。

まず目に飛び込んで来たのは、善吉が男子生徒と談笑していた。

しかしその男子生徒は、赤髪で昔感じた不思議な雰囲気を持っていた。

「まさか…。」

そう呟くとその男子生徒へと足を運び出す。

もしかすると…！、もしかするとあの時少年では！？

そう思っていると、いつの間にか男子生徒の後ろにまで歩いていた。

「ん？」

その男子生徒がめだかの気配に気付き後ろに振り向く。

めだかは確信した。根拠は無いがその男子生徒が、あの少年である事に間違いないと。そして。

「久しぶりっ！！」

めだかはその男子生徒に抱き付いた。

「めだかside out」

「紅葉side」

一体何が起きたんだ？

紅葉は今の起きた状況に全く追いていけなかった。後ろから気配を感じ振り向けば、そこには美人な女子生徒がいた。

だがその女子生徒は紅葉の顔を見るなり『久しぶりっ！』と言い抱き付いてきた。

「誰だお前は？後抱き付くな。暑苦しい。」

だが中々離れようとしない。腕を後ろに回されがちりとホールドされている。

（いい加減鬱陶しくなってきたな…。殴り飛ばして無理やり離れさせるか。）

紅葉が恐ろしい事を考えていると、善吉が女子生徒を見て仰天する。

「めだかちゃん！？どうしてこんな所に？」

「貴様を生徒会に招き入れようと此処まで来た。だが、こんな所で懐かしい人と再会する事が出来るとはな。」

今確か善吉はめだかちゃんと言ったな…。となると、善吉と一緒に待合室にいた子供か。

「分かったから取り敢えず離れる。」

「何故だ？そう恥ずかしがらなくても良いのだぞ。」

「恥ずかしくなどない…。」

「なら良いではないか」

そう言つとさらに回していた腕に力が込められた。

紅葉は諦める事にし、ボソツと呟いた。

「この学校にまともな奴はいないのか…？」

自身もまた、まともな奴ではない紅葉がそう嘆いた。

第四話、生徒会長（後書き）

紅葉とめだかの初絡みでした。

第五話、勧誘（前書き）

最近までテストがあり、結果は散々でした＼（＾Ｏ＾）／

小説書きながらの勉強は難しいです…。

第五話、勧誘

〔紅葉side〕

「生徒会？」

「うむ。善吉と一緒に紅葉もやってくれないか？」

ちなみに俺はめだかとの自己紹介はもう終えている。

何故下の名前で呼ぶのかは知らないが…。

「ちょっと待て！何で俺まで生徒会に入らなきゃならん！？」

「何を言っのだ善吉。お前が入るのは決定事項だ。」

「鬼！悪魔！人でなし！！」

善吉気の毒に…。しかし、このままでは俺も生徒会行きではないか？

「善吉は庶務で決まりだ。紅葉はどうするか…?」

「せっかくだが断らせてもらう。」

「何故だ?」

「出来れば普通に過ごしたいんでな。」

これで諦めてくれるだろう、そう思っていたが。

「何を言う。生徒会に入る事は特別ではないぞ。そもそも、学生が生徒会役員になる事は普通ではないか。」

「…。」

痛い所を突かれた…。しかし、何故ここまで誘ってくるのだ?

「黒神は何故そこまでして俺を誘う？」

「めだかで構わん、別に理由などない。ただ…。」

「ただ？」

「紅葉と善吉、私は貴様達の事が好きだからだ！」

『凜っ！！』という文字が見えてしまうのはたぶん気のせいであろう。

「「いや意味が分からん。」」

「そういう訳だ。早速生徒会室へ行くでしょう。」

「うわっ、引っ張んな！？紅葉何とかしてくれ！」

「もうどうとでもなれ…。」

「遠い目して何言ってるんだ！？こっとなったら俺だけでも…、って力強くて離れねえ！」

離せえええええ。と善吉は悲しげな叫びを教室に残し、紅葉と共に引きずられて行った。

「さっきのアタシすごく空気だった…。」

不知火はそう言うと一人隅でいじけていた。

後日、善吉が不知火のご機嫌取りのために焼き肉に行く事となった。

しかし、不知火の暴飲暴食のおかげで財布の中身がうまい棒も買えない金額になり、その夜善吉は枕を涙で濡らす事となった。

第五話、勧誘（後書き）

意見や疑問に思った事があればいつでも聞いて下さい。

次回は本編から外れるつもりです。

閑話？、普通の高校生になるために…（前書き）

本編には関係ありません。

少しばかり紅葉がハジケます。

閑話？、普通の高校生になるために…

（紅葉side）

昼休み、紅葉と善吉は数人の男子生徒と雑誌を見ていた。

「やっぱり　　ちゃんが良いよなあ…。」

男子生徒Aがそう言っていると、

「×××ちゃんが一番だけだな。」

男子生徒Bがそう反論する。

「何言ってるんだ、　　ちゃんに決まってるだろ。」

最後に善吉がそう告げた。

そう今この4人（正確には3人）はアイドル談義をしていた。

（誰が誰だかさっぱり分かん。）

そう紅葉は普段テレビを見ないせいかな最近のアイドルには全く無知なのである。

「紅葉はどの子が良いんだ？」

「そう言われてもな…、これに載っている奴らは全員知らん。」

「マジかよ!？」

「それは高校生としてどうかと思うぞ？」

「それ程深刻ではないだろう。」

「いや深刻だ！普通の高校生は気になる人が一人いてもおかしくねえぞ？」

「何だと!？」

その言葉を聞いた紅葉は絶句する。

俺とした事が、自ら普通になる事に逃げていたとはな…。

そう紅葉が一人で勘違いをしていると、ある提案が浮かんだ。

「…善吉。」

「どうした？」

「放課後付き合ってくれ、寄りたい場所がある。」

「どこ行くんだよ？」

善吉が聞くと顔をニヤリとし答えた。

「本屋だ。」

〈紅葉side out〉

〈古賀side〉

「アハハ！やっぱりこのマンガは面白いなあ。」

そう言つと古賀は店内にも関わらずゲラゲラ笑い出した。

「古賀ちゃん、ここは店内だぜ。」

「あつ、ゴメンね、名瀬ちゃん。ついマンガが面白くて。」

しかし、その名瀬も顔に包帯を巻きナイフが刺さっているという怪しさ全快であった。

「そう言えば欲しい本見つかったの？」

「ああ、見つかったぜ。」

そう言つと手に持っていた本を古賀に見せる。

『猿でも分かる！楽しい人体解剖！！part・3』

「…変わった本だね。ていうか、part・3って事は1・2もあるんだ…。」

「俺の愛読書だ。」

そんな会話をしていると、

「何買っただよ？」

「まあ待て。ん？アイツは…。」

今何処かで聞き覚えのある声がしたような…。

古賀はその声のする方へ向くと、

「確かアンタは理事長室にいた…。」

（やっぱり。）

古賀が思っていた通り、その声の主は桜島紅葉であった。

「紅葉のこの人と知り合いか？（ていうか服ヤベーだろ…。」）

「ああ、俺達の1つ上の学年の奴だ。」

「あつ先輩だったんスか、こんにちわっス。」

「い、こんにちわ…。」

何であの子（紅葉）がいるの！？絶対本屋とか来なさそーだよ！

「何でお前がいるんだよ。」

名瀬がそう問いただと、

「本屋に来たのだから本を買うに決まっている。」

本とか読むんだ…。何か意外。

「で？紅葉は何買うんだよ。」

「付いてこれば分かる。」

そう言つと紅葉は店内を歩き回る。

3人が不思議そうに眺めていると、

「見つけた。」

そう聞いた3人は紅葉へと駆け寄る。そこは。

「『グラビアコーナー?』」

「そうだ。」

すると紅葉は真剣な顔でグラビア雑誌を漁り始めた。

「() () どういう事だ (なの?) () ()」

3人の考えていた事が見事にシンクロしていた。

閑話？、普通の高校生になるために…（後書き）

続きはいつか閑話？に出します。

後、作者は古賀ちゃんが好きです。

第六話、生徒会補佐（前書き）

シリアス（？）回です。

第六話、生徒会補佐

（紅葉side）

着いてしまった…。今さらながら後悔してきた。

「では役職を決める。庶務は善吉で決まりだ。」

「拒否権無しかよ！もう好きにしてくれ…。」

「後は紅葉なのだが…、何がしたい？」

「俺は役員にはなりたくないのだが。」

「そう言っな。どうか私に力を貸してくれ。」

そう言うためだかは頭を下げそう言った。

「力貸してやれよ、こんなに頼んでるんだし。」

「お前は一人だけ役員になるのが嫌なだけだろ。」

「まあそれも理由だけど…。他にも理由はあるぜ。」

「？」

そう言うとき善吉は真剣な顔で紅葉を見る。

「めだかちゃんはお前の言葉を信じて今まで人を幸せにするために頑張ってきた。だったら、言った本人がそれを実行しなくてどうするんだよ？」

人を幸せにするか…。今の俺に出来るのか？いや出来るハズがない、こんな人殺しに…。

「そこまでだ善吉、本人が嫌がるのなら私は無理はさせない。」

「めだかちゃん…。」

「すまなかつたな紅葉、だがこれだけは言わせて欲しい。私は紅葉の言葉を信じていて良かったと心から思っている。」

何故そこまで気高くいられる…。何故そこまで輝いていられる…。

「ではこの話は無かつた事にしよう。実は早速仕事が入っていてな、それに取り掛からねばならん。」

「待て。」

紅葉がそう引き止めると、ある疑問を聞いてみる。

「何故そこまで人を信じる事が出来る？」

「ふつ、何を言っておる。人を信じる事を教えてくれたのは紛れもなく紅葉、お前だ。」

その言葉を聞いていた紅葉は黙り込む。そして。

「ハッ！ハァーハッハッハァ！！！！」

「どうしたのだ？」

紅葉が大笑いした事にめだか達は怪訝に思う。

「ふっ、的外れな答えが返ってきたものだから、おかしくてしょうがなくなてな。」

そう紅葉は笑い終わった後ふと考え始める。

こんなに笑ったのはいつぶりだろうか…。赤ん坊の頃に両親と遊んでもらった以来だ…。

「気が変わった。俺もめだかを手伝おう。」

「本当か!？」

「ああ、ただし生徒会補佐という形で良いな？」

「それでも構わん!これからよろしく頼むぞ!！」

「紅葉一緒に頑張ろうぜ!」

「ああ任しておけ。」

こうして新たな生徒会が発足された。

（それにしても入ってきた仕事とは何だ？）

第六話、生徒会補佐（後書き）

次回は初仕事に入ります！

第七話、初仕事（前書き）

それではどうぞー！

第七話、初仕事

（紅葉side）

「それで仕事の内容は？」

「これだ。」

そう言うときめだかは紅葉に紙を手渡した。

『私の飼っている可愛いワンちゃんが行方不明になりました。どうか生徒会の皆さん、私のワンちゃんを見つけて下さい。』

「何だよコレ、普通こんなの生徒会に頼まねーよ。」

「何を言う、私は24時k「分かった分かった！やれば良いんだろ！？やってやるよ！」よろしい。」

「全く……犬探しは探偵にでもやらせている。」

「紅葉までそんな事言つのか？だとしたら私、泣いちゃうぞ！？」

「何故そこで泣くんだ…、気乗りしないが仕方あるまい。」

「ありがとう！」

「抱き付くな。後、顔が近い。」

ハア…。全く面倒な仕事が入ったものだ。

「その犬の目撃情報は無いのかよ？」

「うむ、時々この学園内で目撃されている。」

目撃されているのなら、何故捕まえんのだ……。

「仕方ねえなあ、行こうぜ紅葉。」

「ああ。」

二人は行こうとしたが、ふと紅葉が足を止めた。

「めだかは来ないのか？」

「めだかちゃんはない…。この仕事はダメなんだ。」

「何故？」

「動物に…逃げられるのだよ……………」。

めだかはそう言つとorzのポーズになる。

「そうか…ならば仕方あるまいな行くぞ。」

そして紅葉達は犬を探すべく生徒会室から退室する。

くグランドく

「何処にもいねえ……。」

「犬が学園内にいるなんてにわかに信じられないけどね。」

意気消沈の善吉に不知火が後にくくかのように話す。不知火がいるのは、「面白そうだね!」と言い勝手に付いて来てるだけである。

「そもそもどんな種類の犬なんだよ?」

「確か……。」

そう言つと目の前に謎の物体が現れる。

「グルル…、フシユルルルルウウウ！…！」

その物体はおぞましい唸り声をあげたが、外見で犬だと判断できた。

「『いた。』」

いや確かに犬だが……、あれは犬の皮を被った何かではないのか？

「何だよアレ！？どこの肉食獣だよ！！」

「思いだした、確かあの犬はボルゾイと言う種類の犬だ。別名ロシアンウルフハウンド…。」

「ほら！ウルフって入ってんじゃない！！」

しかし犬があんな鳴き声するのか？一体どんな育て方をしていた。

そう紅葉が考えていると、

「こつちに歩いて来たぞ！ーどーすんだよ！？」

「じゃあコレ使いなよ。」

ソーセージ…、餌付けをするのか。だがあの犬（の皮を被った何か）に通じるのか？

「おお！これで餌付けすれば良いんだな！？」

「んーん違うよ。コレをおなかに仕込んでね、『ぎゃああ！内臓食われたー！・・・と見せかけて実はソーセージでした』ってギャグやって欲しいの！！」

してどうなるんだ…。あつ、善吉が死ぬだけか。

「するわけねーだろ！！」

「そつわがまま言わずになっ ほら！もう来てるよ？」

「マジかよ！？ああゝもうクソっ！ヤケクソだあ！！」

そして善吉は犬に突撃して行く。

「グキヤガアアアアアアアアアア！！！！」

「ぎゃああ！内臓食われたー！・・・と見せかけて実はソーセイ・・・
ってマジでぎゃあああつ！！！」

「アヒヤヒヤヒヤ！！ステキ！ステキ！人吉君てば超ステキ」

「写メを撮っている…。」

善吉よ……、お前の事は忘れないぞ。

「勝手に殺すなあ……。でももう瀕死だけど……。」

生きていたか、中々タフな奴だな。

「仕方ない、一旦退却だ。」

一旦態勢を整えるため生徒会室へ向かう事となった。

「なるほど…、その行方不明の犬が人を捕食しようとする程凶暴になっていたと。」

「ああそうだよ。」

不知火を肩車している善吉がそう答える。

「…貴様らのイチャつきは少しばかり腹が立つ。まあ私には紅葉がいるから良いのだがな。」

「抱き付くなど何度言えば分かる……。」

「にしても、何か良い作戦はないのかよ？」

「問題ない、私に任せておくが良い。」

「大丈夫なのか？お前は動物に嫌われているんだろ？」

「ふっ、まあ見ておけ。」

数十分後3人はまた先ほどのグラウンドにいた。

「作戦って何だろな？」

「さあな。」

アイツの事だ、それなりに良い作戦が思いついたんだろう。

「待たせたな。」

やっと来たk…って、

「さあワンちゃんは何処にいるのだ!？」

そこには犬のきぐるみの頭から顔を出しためだかがいた。

「何をしている？」

「演劇部から拝借してきた。この着ぐるみであのワンちゃんと仲良くなる作戦だ!」

コイツは本当に頭が良いのか?悪いのか?

「…ねえ人吉。このお嬢様ってひょっとしてさあ……」

「あ、気づいた？うん。一週回って基本バカだよ」

「やはりバカか……。」

「貴様らは何故この作戦の素晴らしさが分からん！？もうよい！そこで指を啜えて見ておれ！！」

そう言つと意気揚々と犬へ足を進める。

「さあゝ怖くないぞお。私はお前の仲間だぞおゝ。」

「キャイン！キャイン！！」

しかし犬はめだかが近づくと情けない鳴き声をあげ、紅葉の足へと隠れてしまった。

「何故だ……………」

「そう落ち込むなめだか。依頼は達成、おお手柄だ。」

「私はただ仲良くしたかっただけなのに……。」

これはダメだな……。慰めの言葉を入れた方が良いな。

「元気をだせ。ほら、その着ぐるみ姿は中々似合っているぞ?」

「……本当か?」

「あ、ああ……。」

「ウエエーン、紅葉お〜。」

「だから抱き付くなど……いやもう諦める。」

とりあえずめだかが泣き止むまで頭を撫でておく事にした。

「翌日」

「何はともあれ依頼達成だ。みんな感謝する。」

「そうだな。しかし、この花は何だ？」

「うむ、これからは依頼が達成する度に花を飾る事にした。花を飾るのは善吉の仕事だ。」

「オッケー。」

「さあ我々に休む暇など無いぞ！もう次の依頼が来ている。」

「内容は？」

「どうやら剣道部の素行が悪いらしい。改善しなければならない。」

「分かった。」

めだかと善吉は剣道部の活動場所へと向かって行った。

「素行が悪い…か、久しぶりに暴れるか。」

紅葉はニヤリとした顔になり後へ付いて行った。

第七話、初仕事（後書き）

PVが1万目前となり、ユニークも1500以上行きました！

皆さん僕の小説をこんなにも読んでいただきありがとうございます

m ——— m

これからも宜しくお願いします！！

第八話、紅葉の実力（前書き）

紅葉がちよびつとだけ暴れます。

第八話、紅葉の実力

く剣道部員 sideく

ありえねえ……、この大人数で負けるとか…。

「クツクツ、ボロボロだぜ…。」

「何だよアイツ化けモンかよ!」

「うわっ! 鼻血止まんねえよ!!」

俺達は腐っても剣道部員のハズだ。なのにあんなど素人に!!

「にしても、アイツ強かったな。」

「ホントだよ。あーあ、何かスゲー悔しいな。」

「俺もだよ。」

いつ以来だろうか？こんなに悔しい気持ちが出てきたのは。

「……俺真面目に剣道するよ。」

「俺もする！負けたままなんて嫌だからな！！」

その後も他の剣道部員がそれに賛同する。

「へっ、俺だってアイツには勝ち逃げなんかさせねーよ。」

「もう一回みんなで頑張ろうぜ！！」

「へえ…、先輩達みたいなのが出来るとは思えませんがね。」

その言葉に剣道部員達が怒りだが、

「んだと！？誰だテm……。」

「さっきまで不良気取りの先輩達が出来るわけじゃないですか。」

コイツは剣道部の中でも剣道の腕が五つの指に入る程の……、

「ひ…日向……。」

「剣道部員side out」

「紅葉side」

「この依頼は俺に任せてくれないか？」

「何故だ？3人行けば良いだろう。」

「まあ…。だが、その間他の依頼でも片付けておけば良いだろう。」

「んゝ、だかなあ…。」

「良いんじゃないの？その方が他の依頼片付けれるし。」

「むう…、だが紅葉一人で大丈夫なのか？」

「心配には及ばん。」

そう心配はいらない。というか、負ける要素が見当たらんからな…。

〈剣道部活動場〉

「失礼する。」

「あん？誰だよテメー…。」

「生徒会の者だ、剣道部員の素行が悪いと聞いて来た。」

「はい？俺達は真面目なんですけどねえ。」

しかしその生徒の口にはタバコが啞えられていた。

「そういう事だ。少しお前らを改心させなければならん。」

「……調子に乗ってんじゃねーよ！！」

剣道部員が紅葉に右ストレートを放つ。しかし、

「ウラァー！！」

紅葉の右ハイキックが部員のこめかみに炸裂する。部員は壁まで吹っ飛び呆気なく気絶してしまった。

その光景を見ていた他の部員が、

「こ、この野郎っ！」

「ぶっ潰しちまえ!!」

部員が紅葉に襲いかかる。

久しぶりの運動だ…。少し遊んでやるか。

そう考えると近くにあった竹刀を取り、

「ウガッ！」

「グヘア!!」

「アベシ!!!!」

周りいた部員達を一瞬で一掃する。

「ふん、雑魚すぎる。」

やはりウォーミングアップにもならなかったか…。

「これ懲りたら大人しくしておけ。」

「ま…、待て…！」

これで依頼は達成だな。楽過ぎはしないか？

その数時間後、紅葉はめだか達に会い依頼が達成したのを報告し帰ろうとした最中、

（尾行されているな…。）

剣道部員の連中か…？いや、アイツらは無いな。

「良いだろう……。」

そう言つと紅葉は校舎裏まで誘導するように歩いた。

〈紅葉 side out〉

〈？ side〉

「どこに行こうとしてるんだ？」

あの桜島紅葉とか言う男、本当に一人で剣道部を制圧したのか？

「ん？また曲がるのか。」

紅葉を尾行している人物が後を追うが、

「なっ、いない！？何処にいる！！」

「ここだ。」

「後ろだと！？だが、どうやって…？」

「簡単な事だ。俺が曲がった時に高くジャンプをして、お前の後ろに着地しただけだ。」

「マジかよ…、本当に人間かよ。」

「そんな事より、誰だお前…。」

「チッ、仕方ねーな…。」

「そつ言うと紅葉の方へ振り向く。」

「俺は日向だ、お前と同じクラスのな。」

く日向side outく

く紅葉sideく

「日向？」

「ああ、そうだよ。」

日向……。俺のクラスにそんな名前の奴いたか？

「俺は日向なぞ知らん。」

「はあ！？嘘だろ！！！？？」

「本当だ。」

「ぐっ、…まあいい。俺は日向、剣道部に所属している。」

「何？」

さっき叩きのめした剣道部にはこんな奴いなかったが……、

「さっき先輩達を潰したのお前だろ？」

「…だったら何だ。」

「別に何もしねーよ。でもな…。」

そう言うと自称同級生が竹刀を取り出す。

「俺と勝負しろよ。」

「良いだろう。」

「あれ？案外物分かりが良いんだな。」

「黙れ、さっさと来い。」

「んじゃ、遠慮なく！」

日向が紅葉に向かって突きを放つ。

「言い忘れたけど、この勝負は気絶した方の負けだぜ！」

「上等！！」

紅葉は軽く突きをかわす。

「まだまだあ！！！」

そう言って日向が追撃するが、紅葉は涼しい顔をして全て避けてしまった。

「下らん…、少しハンデをやるっ。」

そして俺は両目を閉じる。それでも全て避ける。

「なっ！」

「それでもダメなのか？とことん雑魚だな…。」

「クソがあ！！！」

激怒した日向が竹刀を上から振り下ろすが…、

「もついい…。」

そう言うとき日向の頭を掴み力任せに地面に叩きつける。

頭が地面にめり込んでシュールな光景であるが、された側はたまった物ではない。

「死なない程度に加減した、…たぶんな。」

「……………」

数時間後……、

「おい！誰か抜いてくれー！！」

この後、日向が剣道部員に助けてもらったのはまた別の話で…。

第八話、紅葉の実力（後書き）

普通死にますね…。

次回をお楽しみに！

閑話？、普通の高校生になるために： part 2（前書き）

フラグなのか？

作者も分からん（笑）

閑話？、普通の高校生になるために… part 2

く紅葉sideく

「コイツもないな…。」

これだけのグラビア雑誌だ。どれかは当てはまると思ったのだが…。

「あのく、3人を代表して一つ質問良いか？」

「何だ善吉？」

「グラビア雑誌なんか漁ってどうするんだ？」

「そんなもの決まっている、普通になるためだ。」

「いや真顔で言われても……。」

「もしかして好きなアイドルとかいるの？」

古賀がそう聞くが、

「いるハズがないだろ。」

「ですよ〜。」

「だったら別に良いじゃねーか、いないままで。」

「ダメだ。高校生は気になる人が一人いるのが普通らしいからな。」

「へ?」「」

その言葉に古賀と名瀬はキョトンとする。

「いやいや、別にいなくても普通だと思うよ?。」

「ああ普通だ。」

「何!？」

「どういう事だ!?! ならあの言葉は…、

『普通の高校生は気になる人が一人いてもおかしくねえぞ?』

「善吉! どういう事だ!?!」

「いやあ…、あれは言葉の綾と言いますか…。」

「目が泳ぎまくってるぞ善吉…。」

「もういい…、ならこれ（グラビア雑誌）には用はない。」

「一つ思ったんだけど、お前の好みのタイプってなんだよ?」

「好みのタイプ?」

俺の好みタイプ……、一つも思い浮かばん。

（まあ…仕方ないか。今まで恋愛とは無縁の生活をしていたしな。）

そんな事を思っていた。実際は、紅葉は前の学校ではかなりモテていた。しかし、紅葉はその事に全く気づいていなかったのだ。

俗に言う『朴念仁』と言うものである。

「その様子だと無いみたいだな。」

「もったいないねっ、中々のイケメンなのに。」

何故か知らんが褒めれた…。これは此方も気の効く事を言った方が
良いな。

「アンタは可愛いと思つぞ？愛嬌がある。」

「ふええ！？／＼／」

「ここで口説いた！？」

別に口説いた訳では……。後、何故古賀の顔が真っ赤になっている？

「か、からかわないでよ！な、名瀬ちゃん帰ろ！」

「古賀ちゃん…、顔真っ赤だぜ…。」

「真っ赤じゃないよ！もういい！」

「あつ、待てよ古賀ちゃん！悪かったてー！」

古賀と名瀬が慌ただしく本屋から去って行った。

「何だっただ…？」

「お前よくあんな恥ずかしいセリフ言えるよな…。」

「？思った事を言っただが。」

「これもイケメンの特権か…。」

「…まあ次いでにこの本を買うか。」

「何だよそれ？」

紅葉が買おうとしていたその本は、

『あのジョンス・リー監修！超簡単な八極拳！！』

「スゲー本だな……。」

〈紅葉side out〉

〈古賀side〉

恥ずかしい！あんなセリフ真顔で言われるなんて！？

『アンタは可愛いと思うぞ？愛嬌がある。』

思い出すだけで顔が熱くなる……。こんな顔見せれないよ。

「古賀ちゃん。探したよ……って顔赤っ！？」

早速見られたよ……。

「うう、あんま見ないでよお……。」

「わ、悪い。でもあんな臭いセリフよく言えたよな。」

「本当だよ…。」

「もしかして古賀ちゃん、そういうのに耐性無い？」

「恥ずかしながら……。」

あんな臭いセリフ初めて言われたよお。

「まあ向こうも本気じゃないと思っぜ？」

「う、うん…。」

今日の事は早く寝て忘れる事にしよう。

〈古賀 side out〉

その後、放課後に起きた『古賀ちゃん口説き(?)事件』が何故かめだかに露呈し、紅葉は小一時間問い詰められる事となる。

（おそろく善吉の仕業だな。）

紅葉は心の中でそう嘆いた。

閑話？、普通の高校生になるために： part 2（後書き）

ヒロインは誰にするかまだ決めていません。

「この人が良い」って言う人は良ければ意見をください。

第九話、天敵（前書き）

短めです。

第九話、天敵

（紅葉side）

「何処だここは？」

確かソファで転寝をしてしまって、気づいたら見知らぬ場所に…。

しかし紅葉には見覚えがあった。今自分があるこの場所に。

「教室？」

「その通りだよ、ここは教室だ。」

「誰だ！」

「そう殺気を出さないでくれ、君と争う気はないよ。」

そう言って黒板の前に女性が現れた。

「僕の名前は安心院^{あじむ}なじみだ。僕のことは親しみを込めて安心院^{あんしんいん}さんと呼びなさい」

「何のつもりだ…。」

「何、君という人物に会っておきたくてな。『^{アリバイブロック}腑罪証明』を使わせてもらった。」

「どうやら眠っていたせいだ、俺の過負荷が上手く作用していなかったのか…？」

「だが今なら作用する、さっさと帰るとするか…。」

「じゃあな。」

「まあ待ってくれ。」

そして安心院が紅葉に近寄る。

「君の能力に興味がある……。ぜひ欲しいよ。」

「ふん、それが狙いか。」

「安心してくれ、他の能力をあげるから。」

「悪いがこれで間に合っている。」

だが安心院が目の前まで移動していた。そして顔を近付ける。

「じゃあ頂くよ…。」

「断る。」

唇と唇が付きそうになる前に安心院の顔を掴む。

「……ひゃふえふえくへえひゃひか（やめてくれないか）？」

「何故キスをしようとした？」

「僕的能力『口写し（リップサービス）』で、スキルの授受をしようとした。」

「やめておけ、ただのキスになるだけだ。」

「本当かい？」

「ああ。」

しかし、この女どうして俺の能力を知っている？

「……最高だ……。」

「は？」

「君の能力、ますます欲しくなったよ！」

「……。」

「とはいえ、確かに君の能力を頂くのは至難の業だな。」

「なら諦めろ……。」

「それは無理だ、これ以上天敵を増やしたくないからね。」

「天敵？」

俺がコイツの天敵？別に争う気はないのだが……。

「何故お前と殺り合わなければならない。」

「ふむ、信じて良いのかい？」

「ああ…。」

二人の間に沈黙が生まれる…、

「良かったよ…、君が良い人で。」

「そうか、それじゃあ帰るぞ。」

「ま、待ってくれ。」

まだ何かあるのか…、早く帰りたいのだが。

「君とは仲良く出来そうだが、これからも友達でいようじゃないか。」

「悪いがお前の事は信用出来ない。」

「もう能力を奪おうとはしないよ、安心したまえ。安心院^{あんしんいん}だけに。」

「……チッ」

「…今舌打ちしたね？」

「じゃあな。」

そう言うと紅葉は自らの過負荷を使い、その場からきえる。

〈紅葉 side out〉

〈安心院 side〉

「無愛想だが悪い人ではないな…。」

久しぶりに人と話した気がする。少しだけ心が軽くなったかもしれない…。

「困った事があれば助けに行くよ、友達だからね…。」

そうだな…、友達は大切にしくはな。

「さてと、今度はちゃんとウケるギャグを考えなくては。」

待っててくれ…、次会った時は抱腹絶倒させてあげよう。

第九話、天敵（後書き）

意見を下さったアクセルロイさん、WKさん、スノウさんありがとうございます。

これからもよろしくお願いします m () m

第十話、天才vs化物（前書き）

阿久根戦です。

戦闘描写って書くの頭使います……。

第十話、天才vs化物

く紅葉sideく

「今日はどんな依頼が来てんだ？」

「今日は柔道部から来ている、何でも柔道部の今後に関わる事らしい。」

「そりゃ大事じゃねーか。早く行こうぜ。」

柔道部か、一体どんな厄介事を持ち込んだんだ？

く柔道場く

「いらっしやい！待ってたで生徒会のみなさん！！」

「鍋島三年生、本日はどういったご用件で？」

「うん。実はウチ柔道部の部長なんやけど…、もう引退せなあかねん。」

そして鍋島はめだかの肩を掴みだす。

「そこでや！部長を引き継いでくれる部員探しを手伝ってくれへんか？」

「良いだろう鍋島三年生！この黒神めだが、全身全霊をもって手伝いましょう！-！」

「ホンマに！？恩に着るわぁ。んじゃ、早速部員達と戦ってもらわ！」

数分後……、

「さあ来い柔道部諸君！私を倒し見事部長になってみせよ！-！」

「ノリノリじゃねえか。」

「しかしあれでは意味が無いぞ。……部員達が全く歯が立たないじゃないか。」

紅葉の視線の先には、めだかが柔道部員達をいとも簡単に投げ飛ばしている姿だった。

「うーん…、やっぱり黒神ちゃんには勝てれへんかあ。」

「どうするんだ？このままでは部員の自信が削ぎとられるだけだぞ。」

「どないしよか？」

「……俺に聞くな。」

「ん？君達は…。」

そう言つと金髪の男子生徒が歩いて来る。

「二年生の阿久根高貴君やで。」

「阿久根だ。君は？」

「……桜島紅葉。」

「桜島君か、よろしく。で、横にいる男が。」

「……お久しぶりっす。」

「そうだな、久しぶりだね。」

何故こんな険悪なムードなんだ？というか知り合い成る程……、簡単にいうとめだかを奪い合っている仲という訳か。

一人盛大に勘違いしている紅葉はそんな光景をボーッと見ていると、

「せや！ええ事思いついたで！」

「どうしたんですか？」

「うん。部長についてやけど、阿久根クンが勝ったら生徒会に入り人吉クンが負けたら柔道部に入ってウチの柔道の部長になる。どない？」

「アンタまさか今までずっと考えてたのか？」

「？。うん、そうやけど？」

部員の喧嘩を止めなくて良いのか……。まあそんな事気にする奴には思えんが。

「まさか鍋島先輩それが目的で？」

「あ、バレた？まあええやん。人吉君みたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きなんよ！」

これが今世間で噂になっている『リア充』なるものか…。やるな善吉よ。

「紅葉…お前何か色々勘違いしてないか？」

「気にするな。」

「じゃあ早速黒神ちゃんに相談してくるわ！」

そう言う鍋島がめだかに向かって行く。

「良いでしょう！誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け付ける。どんな内容でや条件でも、如何に困難で理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会執行部だ！！人吉善吉、私は貴様に負けるなどとは言わん。しかし逃げることは許さんぞ！！」

まあ面白いのならそれで良いか、善吉には悪いが。

数分後、善吉と阿久根は柔道着に着替え対峙していた。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式や！無制限十本勝負対無制限一本勝負！阿久根君に十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや人吉君！」

二人が互いに頷く。

「それでは始め！！」

鍋島がそう言った瞬間、善吉が阿久根の襟を掴むが

、

『ズドン！！』

善吉は綺麗に一本背負いされていた。

（簡単に決められたな、これは勝てるかどうか…。）

その後も阿久根は次々と勝ち数を増やしていった。

「さすが阿久根君、綺麗な一本やな。後の先取らせたら右に出るモンはおらんわ。ホンマ天才的で………つまらん柔道や。」

「どうやらずいぶんと天才がお嫌いなようだな鍋島三年生。」

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんも阿久根君のこともな。才能を努力で踏みにじりたくてウチは柔道をやっとんのよ。」

ずいぶんな物言いだな……。まあ確かに俺もある意味で天才は嫌いだが。

「安心しろ鍋島三年生、天才などいない。」

「……へ？」

そう言つとめだかは一步前出る。

「善吉！いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなど
は言わん。だから勝つて！！」

そしてめだかは少し涙目になりながら、

「貴様がなくなつたら私はすごく嫌だぞ！困るぞ！泣いちゃうぞ
！！」

……善吉も苦勞しているな。しかし、こつも人は変わるものなのか？

そう思つていた矢先、善吉が阿久根の両足を持ち上げて倒した。双
手刈りというものだ。

「信じられへん…。阿久根君にホンマに勝つてしもた。いや、それ
より双手刈りならウチもよう使っけど人吉君はあんなにも綺麗に…
…。」

「鍋島三年生、私は天才などではない。善吉と紅葉がいるお陰で生徒会をしていける。私もただの凡人に過ぎない。」

めだかがそんな事を思っていたとはな…。

「むう、じゃあ桜島君くれへん？」

「何？」

「さっきの阿久根方式で構えへんやろ？」

「良いだろう…。紅葉やつくれるな？」

「勝手にしろ……。」

まあ大体予想はしてたが……。だが、いざやるとなると面倒だ。

「じゃあ阿久根君お願いなあ。」

「……………分かりました。」

さっきの敗戦のショックから立ち直った阿久根も了承する。

「柔道着に着替える、少し待て。」

数分後、紅葉と阿久根が向かい合っていた。

「ルールはさっきと同じやで。それでは……………始め!!」

「悪いが即刻で終わらせてもらっ!」

阿久根が掴み掛かるが、

「ふん…。」

次の瞬間、紅葉の姿が消えてしまう。

「なっ、消えた！何処に行った！？」

「こっちだ。」

「「「「！！？？」」「」」

その言葉に4人が驚く。それもそのはず、消えた紅葉が阿久根の背後に現れたのだから。

「ぐ、いつの間に…！」

「驚いている暇など無いぞ。」

そう言うとき紅葉は、ものすごいスピードで阿久根を掴み一本背負いする。周りから見れば、いつの間にか阿久根が投げ飛ばされていたにしか見えなかった。

投げ飛ばされた阿久根は目を白黒させ、他の3人は啞然としていた。

「終わりだな？ 帰らせてもらうぞ。」

紅葉は他のみんなを置いていき柔道場から出ていった。

翌日、紅葉と善吉は生徒会室に向かっていた。

「まさかお前があんなに強いとは思わなかったよ。」

「そうでもない、ただ喧嘩慣れしているだけだ。」

「いや、アレは喧嘩じゃなくて柔道な。」

ドアを開けるとそこには身だしなみをチェックしている阿久根がい

た。

「……何故アンタがいる？」

「ん？ああ二人とも来てたのか。なあに、答えは単純だ。」

阿久根は善吉を見据える。

「君を追い出すのは諦めたが、俺はめだかさんを諦めたわけではないのでな。それに鍋島先輩に退部勧告をされてな。それに……。」

「「それに？」」

「鍋島先輩に言われたんだ、『その努力と根性で惚れた女一人ものにしてみんかい！』ってね。」

これは応援しているのか？それともただの厄介払いなのか？どっちなんだ鍋島……。

「と、いうことで。本日付で生徒会執行部『書記』に任命された二

年十一組、阿久根高貴だ。よろしく願います、先輩！」

こうして現在の生徒会は阿久根を新しく入れ、4人（？） となった。

第十話、天才vs化物（後書き）

ヒロインはもしかしたら古賀になるかも……？

まだ決めてないですけどね。

第十一話、紅葉恋愛相談所？（前書き）

閑話？に誤字がありました（泣）

「褒められた」を「褒めれた」にしてみました、ご了承ください…m
—（m

第十一話、紅葉恋愛相談所？

ラブレターとはご存知だろうか？

それは、気になっている相手に対して自分の気持ちが書いてある恋文の事である。

しかし、そのラブレターを渡せずじまいで恋が終わる者も少なくない。

そんな甘酸っぱい悩みを持つ生徒が生徒会に相談を持ちかける。

く八代sideく

八代三年生は生徒会室の前にいた。そう、彼女もラブレターについてある悩みを持っていた。

何時でも相談して来いつて言ったよな。でも、後輩に恋愛相談とか恥ずかしいな…。

「ええい！どうにでもなれ！」

そうして八代が勢いよく開けると、

「成る程…、ここはそうするのか。」

そこには中国武術によくありそうな動きをしている男子生徒がいた。

「……間違えました。」

見なかった事にしよう…。やっぱり最初から友達に相談するべきだったよ。

そう思い出て行こうとしたが、

「ん？相談者か、ゆっくりしていけ。」

「うえ！ちよつと！？」

その男子生徒は八代の後ろ襟首を掴むと来客用の椅子まで連れていく。

「生憎、生徒会長は今留守にしている。そこで待っている。」

「なんて横暴な…。」

そう言う男子生徒は、また中国武術のような動きをする。

「最高級に気まずい……。」

八代は生徒会室に来た事を猛烈に後悔した。

く八代 side outく

く紅葉 sideく

「ふむ、こんなものか。」

やはり、あの時買った本は正解だったな。これのおかげで大分理解する事が出来た。

《あの本とは閑話？で紅葉が購入したものです。》

そう言えば…、さつきから何故あの女は気まずそうにこちらを見ている？

「……………」

（しかしめだか、遅すぎるぞ…。とりあえず内容だけは聞いておくか。）

やれやれと、思いながら女子生徒に聞いたです。

「で、今日は何のようだ？」

「えっ、でも黒神さんいないじゃん。勝手にやって良いのかよ？（いきなりでびつくりした…）」

「構わん、こつ見えても生徒会の端くれだからな。それで何の用だ？」

「…じゃあ……、言わせてもらつよ。」

八代が言おうとしたが、不意にドアが開く。

「桜島君、来てたのか。」

「阿久根さんか。」

紅葉は一応年上と話す時は『さん』付けをしている。そうしないと生意気だと言われ、この前に先輩に絡まれたからである（当然返り討ちにした）。

「おや、もう相談者が来ていたのか。」

「ああ、じゃあ…早速内容を教えてくれ。」

「わ、分かった…。」

そう言うと八代は説明し始めた。

「実はラブレターを書きたいん、書けばいいだろ。」いや最後まで聞いてくれない!？」

八代がプロ顔負けの突っ込みをすると、続きを話す。

「ラブレターを書こうにも字がヘタクソなんだよ。ほら、アタシずぼらな性格だし。」

いや知るわけないだろ……。

「だからどうしたら良いか教えてくれない…?」

「こついうのはどうでしょう?、僕が代わりにラブレターを書きましょう。そうすれば、字が下手なのは隠す事が出来ます。」

『代わりにラブレター書きましょう』だと？馬鹿げてるな…。そんなものコイツの為にならんぞ。

「それ良いねえ、じゃあ早速頼むよ！」

そう言うと二人は集中しやすい図書室へ向かった。数分後、めだかが生徒会室へ入って来た。

「うん？まだ紅葉しか来ていなかったのか。」

「さっきまでな。」

「誰かいたのか？」

めだかがそう聞くと、阿久根が生徒会室へ帰って来た。

「すまない、忘れ物をしてしまった。おや、めだかさん。」

「ちょうど良い、アイツに聞け。」

「そうだな。阿久根書記よ、私がない間に何があったのか報告を要求する。」

「分かりました。まず、」

それから阿久根が今までの経緯を話す。

「どうでしょう！？僕の方法は？」

「…がっかりだ。」

「え？」

「貴様には失望した、もう何もなくていいぞ。」

そう言つとめだかは生徒会室から出て行つた。

当然の結果だろうな。まあ…阿久根にしては最悪の結果だがな。

「何故…何故なんだ……？」

（……チツ、仕方ない。）

ここは阿久根の為に一肌脱いでやるとするか…。しかし俺も丸くなつたものだ。人に対して気を遣うなんてな……。

そう思つと紅葉は図書室へと向かつた。

く紅葉 side outく

く八代 sideく

「遅い……。」

どついう事だよ！？女を待たせるなんて仮にもアタシはレディだぞ！！

「やはりここか。」

「あつ、さっきの…。」

アイツは生徒会室にいた中国武術の人だ…。何でここに？

「先に言っておこう、阿久根は来ないかもしれんぞ。」

「えっ、なっ何でだよ!？」

「生徒会長に戦力外通告を受けたのでな。今はショックで動けん。」

「そうだったのか…、じゃあ代わりにお前書いてくれよ。」

この際この人でも良いや、アタシの字の下手さに勝てる人なんていねえし……。

だがそれを聞いた紅葉はため息を吐いた。

「それでお前は良いのか？」

「どういう意味だよ…？」

「では言い方を変えよう。お前は自分のラブレターを他人に書かれても良いと思っているのか？」

「それは！その……。」

確かにあの時は他の人に書いてもらえば良いと思ってた。でも、冷静に考えてみると……。

「嫌だろっな、それはそうだ。お前がもし逆の立場ならどう思う？」

「そんなの…そんなの……ムカつくに決まっている！」

「ム力つくよ…、所詮アタシに対する気持ちはそんなものかってね。」

「だろうな、結局は軽い気持ちだったんだと思われるだけだ。……それでどうする？」

「どうするかなんて…、やる事はこれしかないだろ。」

「字を上手く書けるように練習するよ。」

「ふっ、まあ…頑張るんだな。」

「素直じゃないねえ、楽になれば良いのに。」

「では帰らせてもらっ。……一つ言い忘れていた。」

「何？」

「阿久根の事は許してやってくれ、アイツなりにお前の願いを叶いさせたかっただけだ。」

「そんなの…全然悪く思ってないよ。」

「…そうか。」

そうして紅葉は図書室から退室した。

「不思議な奴…。」

年下なのにどこか説得力があって貫禄があった…。でも、アイツのおかげで本当にやるべき事が分かった！

「よし！頑張るぞ！！」

「図書室では静かに！」

「…すいません…。」

受付に注意されテンションが下がった八代であった。

「八代 side out」

「紅葉 side」

とりあえずあの女はひとまず大丈夫だろう。だが、字を練習するなら講師がいるな……。

「後は阿久根か…、世話の焼ける先輩方だ。」

紅葉は阿久根がいるであろう生徒会室へ歩く。

第十一話、紅葉恋愛相談所？（後書き）

人の心の描写ってムズいです。

というより小説を書く事自体ムズい……。

第十二話、立て！立つんだ阿久根！！（前書き）

なんか阿久根がヘタレになった。

阿久根ファンの皆様すいません。

第十二話、立て！立つんだ阿久根！！

〔阿久根 side〕

「はぁ……………」

阿久根は椅子にもたれかかるように座り、真っ白になっていた。その姿はまるで、『あしたのジョー』を彷彿とさせていた。

「何がいけなかったんだ…？」

俺のやり方は間違っていたのか？自分はただ、少しでも告白が成功する確率を上げようとしただけだ……。

「……はぁ……………」

阿久根は本日五十回めのため息をつく。

そしてふと過去の事を思い返す。

「あの時はめだかさんに酷い事をしたな……。」

阿久根は、過去にめだかにした自分の行動を今でも気に病んでいる。

「でも、めだかさんは強かった。自分より遥かに……。」

そう、そんな気高いめだかを阿久根は尊敬していた。

そんな人物に戦力外通告を受ければ誰だって落ち込むであろう。

「へこむな……。」

もし、今の自分を見ためだかさんはどう思うのか？また軽蔑するだろうか……。

「いつまで落ち込んでいる。」

「うわっ！って、桜島君が…、いつの間に帰って来たのか？」

「一応ノックしたぞ、気がつかなかったのか？」

「あー…すまない。気づかなかった。」

「は…、後輩に恥ずかしい所を見られたな。」

「ところで、どうして戻ってきたんだ？」

「いつになっても図書室に来ないのでな、呼びに来ただけだ。」

「図書室？ああ…さっきのラブレターの事か。」

「早く行け、相談者が待っている。」

「しかし、俺はもう……。」

『そんな事出来る立場じゃない。』そう言おうとしたが

「いい加減にしろ！それでも貴様は生徒会の一員か!？」

＼阿久根side out＼

＼紅葉side＼

「いい加減にしろ！それでも貴様は生徒会の一員か!？」

全くここまで弱っているとは、メンタルが弱過ぎる…。

「貴様は生徒会の一員だろ！学園で困っている者を助けるのではないのか!??なのに貴様ときたら……!」

「

紅葉は阿久根の胸ぐらを掴む。阿久根は突然の事に口をポカンとしていた。

「一度や二度の失敗ぐらいで弱音を吐くな！！このままめだかに見捨てられたままで良いのか！？」

まあ…めだかがそんな事をするとは思えんがな、念のためにだ。

「それが嫌なら行動で示せ！……独り言だが相談者が字の練習をしている。講師が必要だろうな。」

そう言い残すと紅葉は生徒会室から出て行った。

中々の演技だったな…、これで阿久根も動くだろう。後は、めだかに『阿久根が字の練習に付き合っている』と報告すれば良いか。

「本当に世話の焼ける奴だ……。」

次の日、阿久根が礼を言ってきた。どうやら俺の作戦通りにいったらしい。

相談者は字が上手になり無事ラブレターを書き、めだかにも許してもらったようだ。

「君には感謝しきれない。本当にありがとう。」

「この礼は高くつくぞ？」

「任せてくれ！…そういえばあの相談者、告白は成功したらしい。礼を言ってきたよ、勿論君にもな。」

「そうか…、そいつは良かった。」

しかし、このままコイツらと仲良くやっていけるのか？フラスコ計画が始まれば、俺にもすべき事がある。その時は……。

「どうしたんだ？難しそうな顔をして。」

「いや…何でもない。」

まあ、その時はその時だ。今は『人助け』をしていくか……。

「さて…、次の依頼は何だ？」

第十二話、立て！立つんだ阿久根！！（後書き）

難しい文を書こうとしたけど、全然難しくない…orz

1 報告

この前ヒロインは誰にしようかと言いましたが…、

古賀ちゃんにしようと思います。

今までもらった感想で古賀ちゃんが一番を多かったのもありますが……、

何より、作者は古賀ちゃんが原作の女性キャラの中で一番好きだからです。

しかし、原作の古賀ちゃんは若干空気ですから独自の展開があるかもしれません。ご了承を……。

でも作者的には微ハーレムも良いかなんて思っています。

そうになると、紅葉に正室と側室が出来そうです。素敵ですね。

「報告（後書き）」

ちなみに好きな漫才師は『磁石』です。

閑話？、合コンへGO！（前書き）

なんかラブコメみたいに仕上がった…。

閑話？、合コンへGO！

（紅葉side）

「桜島、お前今度の日曜日合コンに来い。」

「は？」

「だーからー、合コンだよ！合コン！！」

いきなり何なんだ…、というより、合コンって何だ？

「実は人手が足りねーんだよ、頼む！一生のお願いだー！」

「いや、合コンって何だ」「よし来てくれるのか、ありがとうーじやあ、また今度の日曜日の近くのカラオケ店でなー！」……………」

こうして紅葉の合コン行きは強制的に決定した。

合コン…、おそらく合（法的な）コ（ろし合い）（コ）ン（クール）

……略して合コンだな!?

「合法的な殺し合いコンクール、凄まじいコンクールだな……。」

しかし、そうと解れば話は早い。生き残るのは……俺だ!

また盛大な勘違いしたまま、紅葉は今度の日曜日のために鍛練に励むのであった。

〈紅葉 side out〉

〈古賀 side〉

箱庭学園付近のカラオケ店、その一室に3人の女子がいた。

「……来ちゃった。」

「ほらほら来たからには覚悟しなきゃ、いたみちゃん!」

「いや、合コンなんて初めてだから……。」

つい中学の時の友達に誘われてOKしちゃったけど……、緊張するな…。

「やっぱり名瀬ちゃん連れて来れば良かった……。」

古賀は親友である名瀬も誘ったのが、

「そいつら実験動物にしているのか？」

と聞かれ、この人を連れて来たら危険だと感じて一人で来たのだ。

「大丈夫だって、アタシとC子がいるから。アタシ達合コン慣れているし。」

「うう…頼んだよ？」

「まっかせなさい!!」

それから少し時間が経つと、古賀達のいる部屋のドアが開く。

「ごめん、お待たせえ。」

「っ!？」

「やっと来た…、遅いよA郎。」

「スンマセン、時間にルーズな奴がいました。」

そう言うと3人の男子が入って来る。しかし、その中にいる一人の男子に古賀は驚愕する。

その男は、以前自分に口説いてきた桜島紅葉であった。

「嘘でしょ……。」

何でいるの……？合コンに参加しなさそうな人ランキング上位に入るよ！

「ん？お前は……。」

「ひ、久しぶり……。」

そのやり取りにC子が古賀に耳打ちする。

「ちょっといたみちゃん、あのイケメンの子と知り合いなの？」

「う、うん。ちょっとした知り合い。」

「ずるい！抜け駆けなんかして！？」

「し、してないよっ！」

「あの、そろそろ始めませんか？」

その一言でC子は平静を取り戻した。

「そうね。じゃあ、まずは自己紹介から。」

そう言うと女子が自己紹介を始める。（都合により割愛）

「じゃあ次男子ね。」

「ういっす、俺はA山A郎です。シャイでお茶目な16歳です!」

シャイでお茶目なんだ、めんどくさそう……。

「僕はB川B男って言います。特技はイオナズンです。」

イオナズン出せるんだ…、見たいけどMP足りないんだろうなあ。

そして、いよいよあの話題の男の出番が来た。

「……………桜島紅葉だ。」

……………だけ！？それだけ！？名前紹介しただけじゃん…。

しかし古賀のそんな思いとは裏腹に、

「へえ、桜島紅葉っていうんだ。良い名前だね！」

「ねねっ！何処の中学だったの？」

食い付いた……。桜島紅葉おそるべし！

自己紹介もそこそこ、その後は各自がカラオケをする事になった。

「じゃあ次は俺で！」

「いいねえA郎行つといでえ！」

「盛り上がってるね……。」

「ああ……そうだな……。」

そう答えた紅葉はどこか疲れている様子だった。それもそのはず、先程まで女子に質問攻めを食らっていたのだから。

「しかし……何時になったら殺し合いは始まるんだ？」

「……へ？殺し合い？」

何処で？何時？何で？

「合コンとは合法的な殺し合いコンクール、略して合コンなのだろ

「？」

「いや違うよ！何処にそんな恐ろしいコンクールあるの！？」

「ここにあるだろ。」

「ないよ！？」

この人…大物になるよ間違いなく。

「そう言えば……。」

「…まだあるの？」

今度は何が来るんだろ……。でもさっき以上の衝撃は無いと思うけど。

「この前は…おかしな事を言っすまなかつたな。」

「おかしな事？」

「いや、あの時お前の気分を害したと思ってな。」

「あ、それは……。」

いきなりでびつくりしたよ……。確かにあの時は恥ずかしかったけど、
ただだ……、

「そ、そんなに嫌じゃなかったよ………。／／／」

「……。」

「な、何言っただろあたし！思わず変な事を……。」

「……別に变ではないと思うぞ。」

「えっ………？」

「お前がそう思っただったら、そう受け止めるのも有りだろう。…」

……まあよく分かんがな。」

も、もも、もしかしてこれって告白のつもり！？そんな訳ないよね？
？そつだよね！？

「…うん、そつだね…／／／」

あたし何言ってるんだろ。でも、悪い気分じゃないけど。むしろ……、

「あつ、そつだ！アドレス交換しようよ。」

「ん…ああ良いぞ。」

紅葉の携帯の中で初めての女性のアドレスは古賀となった。

〈古賀side out〉

〈紅葉side〉

こうして合コンは無事終わり、それぞれ自分の家に帰る事になった。

「じゃあ、またメールしてよね!？」

「分かったからもう帰れ、向こうで友達が待っているぞ。」

「あつ、やば! バイバイまた学校でね!」

「ああ……。」

行ったか……。しかしあの時、何故あんなに顔が赤くなったのだ?

「女というのは分かん。」

そう言うとき紅葉も一人自宅へ歩いて行った。

後日名瀬に会い、古賀がものすごくご機嫌になってたらしい。何故だ?

閑話？、合コンへGO！（後書き）

これはまだ友達以上恋人未満ってやつですよ。

…たぶんね…。

第十三話、水中大運動会（前書き）

グダグダになった…。

第十三話、水中大運動会

くめだかside

「うーむ…。どうすれば良いのか。」

今回は目安箱に二つの紙が入っていた。だが、少々厄介なものだな……。

「どうしためだかちゃん？」

「これを見れば分かる。」

そう言つと善吉に紙を渡した。

「なにになに…、えーと『部費をあ・げ・て』と『プール使えやコラ』か。確かにこれは……。」

「うむ、どうしたものか……。」

「んー、いつそのこと二つを合体して一緒に解決させたら良いんじゃないか？」

「ほう。」

成る程その手があったか。だが、どうやって？

「俺に提案があんだけどさ……。」

くめだか side outく

箱庭学園のグラウンドの隅にはプールがあった。しかし、そこは長い間使われておらず今では不良の溜り場になっていた。

それを良しと思わなかった学校側はプールを新設したのだが、一向に使う気配がない。

だが奥の手はある、黒神めだか率いる生徒会だ。そして思った通りプールの良い使い道を考えてくれた。それは、

『増額部費争奪！第一回、水中大運動会！！』

そんなポスターが掲示板に貼られていた。

（紅葉side）

「始まったな。」

「ああ！優勝はいただきだぜ！！」

善吉よ…、何故お前はそんなに楽しそうなんだ？

「どうした人吉君、えらくやる気じゃないか？」

「俺こういう祭り事好きなんすよ！それと、一度プールで運動会やってみたかったんですよ。」

「まさか君の夢がこんな形で実現するとはね……。」

阿久根は知らなかった、善吉がこの夢を叶える為にめだかに『水中大運動会』を推したことを。

「そんな事より競技が始まるぞ！」

「第一種目は水中玉入れです。」

まさかこの年で玉入れをするとはな、それより司会の横に不知火がいるのは何故だ？

「ここは私一人で行こう、みんなはストレッチでもしておくが良い。」

「「「分かった。」」」

3人がその声を合わせた、『めだかが行くなら行かなくても大丈夫だろう。』そう思う3人だったが、

「第一種目の一位は、得点が20ポイントの生徒会と競泳部でした。」

「やるな競泳部……。」

「まあパフォーマンス部門があれば文句なしで一位だったけどな。」

確かに水中からのダンクなど常人には不可能だ。……常人にはな。

「第二種目は！水中う二人三脚でええええすう！！」

司会のテンションがおかしくなった、良い事でもあったのか？

「では善吉と阿久根2年生に頼もうか。」

「善吉…、もし無事帰って来たら……飯を奢ろつ。」

「やめてくんない？何か死に行くみたいじゃん…。」

そんな会話をし善吉と阿久根はプールへと向かった。

「なんや黒神ちゃん、二種目めは見学かいな？」

そんな事を言いながら鍋島が残った生徒会メンバーに近づく。

「私だけ出ても生徒会は成り立たないのでな、鍋島三年生。」

「成る程なあ。あつ、もう一つ聞きたい事あるんやけど？」

「何だ？」

「桜島君貰ってi」却下。「ええやん別に！なあ桜島君！？」

「ダメに決まってるだろ。」

何なんだこの女……、阿久根に勝ったから柔道部に行く義理はない

だろう。

「そもそも何故俺なんだ？」

「それは桜島君が強いからや。その強さは天才だからとは違う、人より変わった努力をしたように思えるんよ。」

人より変わった努力か…、確かにこの力を制御するのは苦勞の連続だったな。

「それにしても、まっさかあの3人も参加するとはな。」

「あの3人？」

「ほら、競泳部のトビウオ三人衆やん。」

トビウオ三人衆……、名付け親は誰なんだ？もう少し気の効いた名前があるだろう。

「まっ、実際厄介やでーあいつら！ゼ二の為ならホンマなんでもしよるからな！ホンマ何を考えているかわからへんし、理解でけへんわ。」

「別にわかってもらおうなんて思っていないよ、あたし達は。」

そこには一人の女が仁王立ちしていた。紛れもなく、その女がトビウオ3人衆の一人である。

「でも何したいかは教えてあげるよ。あたし達はね……。」

「何や…一体？」

「あたし達は、札束のプールを作りたいんだ!!」

「……………は？」

札束のプール…、馬鹿の考える事だな。

「そんなにゼニに執着してるとカネゴンになってまうで。」

「なるわけないじゃん。」

「そこまで金が欲しいなら働け。」

「黙れっつ!!」

突然、競泳部の一人が怒鳴り声をあげた。

「お前に何がわかる！何も知らず、ただ普通に幸福な暮らしをして
いたお前に！私の何がわかるっていうんだあ！！！」

「幸福だと……？」

その一言が紅葉の逆鱗に触れた。

「貴様…死にたいらしいな……。」

「な、何よ……。」

この女…生かしておけん、あの研究者共と同じ目に遭わせんと気が済まん！！

「落ち着け紅葉！？」

「ちよっ、ちよっと待ちや！」

二人が慌てて止め、紅葉は正気に戻った。

「……………すまない。」

「ふ、ふん！」

競泳部の一人がその場から離れる。

「一人にさせてくれ。」

「紅葉、昔一体何が……？」

「何も言つな、…次の競技は俺が行く。」

「わ、分かった…。」

昔の事など誰にも話す気はない。むしろ話したくもない、同情されかねんからな……。

「二種目めの一位はあ、競泳部う！二位は陸上部う！三位は生徒会となつちやいましたあ！！三種目めはうなぎ掴み取りだああ！」

もはや狂っていると言われてもおかしくない司会は、何故か目を輝かせていた。

そしてうなぎ掴み取りが始まった。

「うわっ！ すごえヌルヌルだよ！？」

「全然掴めねえ！」

「キヤー！ うなぎが水着の中に！！」

競技参加者の悲鳴が聞こえる中、紅葉は冷静であった。

「掴んで壺に入れるのか。」

なら簡単ではないか、苦戦する意味が分からん。

そう考えると近くにいたうなぎを掴み　、

『ぐちゃっ
』

握り潰す。

そう、紅葉は持ち前の怪力でヌルヌルの壁を容易く破ったのだ。握り潰したうなぎはピクピクと痙攣していたが、紅葉はそんな事にせず壺へと放り込む。

「グロッ……。」

「あれじゃあうなぎ食べれないよ……。」

司会と不知火がそう呟く。

「まだだ、まだポイントは稼ぐ！」

紅葉は周りいたうなぎに次々と手を出していく。終わってみれば、

「ただいまの競技…、一位50ポイントの生徒会、二位は13ポイントの競泳部、三位は9ポイントの柔道部です…。最後の種目は騎馬戦です、ハア……………」

「元氣出しなよっ」

司会は不知火に励まされるが思ったより傷が深いらしい。

「じゃあ、こつからアタシが司会ね！ま、やるのはフツの騎馬戦だよ。ハチマキの奪い合い！ハチマキ取られたり騎馬が崩れて水中に落ちたら失格」

普通だな……。だが不知火の事だ、何かしら特別ルールを付けるだろう。

「ただし！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなので、ここでクイズ番組的な救済ルール！集めたハチマキの数じゃなく質で獲得ポイントを決定！上位チームのハチマキほど高くポイントを設定します」

…どうやら不知火は俺達と競泳部を戦わせたいらしいな。

「大好きだぜ不知火……！！」

「イツエーイ！アタシもアタシが大好きー！！」

やれやれ…やるしかないか。

「それじゃあ最後の種目だよっ！位置についてよぉーい………どん
っ！！」

開始の合図が出たと同時にめだかは競泳部に立ち向かう。

しばらく取っ組み合いが続いたが、

「もらったぁ！！」

「ぐっ…！」

「あつ、生徒会長さん突き飛ばされた。生徒会の負けかぁ」

「いや、アイツがあれで終わると思えんな。」

そこには水の上に立っているめだかがいた。正確には善吉のヘルパ―だか。

「甘えたことを抜かすでない！例え貴様が地獄のように不幸でも、そんなことで命を投げ捨てるな！！」

「う、うるさい！」

「高い買い物をしたものだな喜界島同級生よ！貴様は私の怒りを買った！！」

めだかは喜界島に向かって跳躍する。そして、

「貴様達が死ねば私が悲しむ!!」

「むぐっ!？」

キスをした…、する意味はあるのか？謎だ……。

そして二人仲良く着水する。

「そこまでっ！競技を終了するよー!」

「やっと終わったか…。」

どうやらめだかも着水する寸前に競泳部のハチマキを取ったようだな。優勝で決まりか？

「結果発表だよー。さあ、第一位に輝いたのは………生徒会!!」

まあ当然か…。

「ではなくて、柔道部でえーす」

「やーどーもどーも！」

……は？嘘であろうな不知火、少し遅れたエイプリルフルをして
いる場合か。

「混乱してるねえ、説明してあげるよっ！生徒会と競泳部が戦っ
てる間に、柔道部は他の全チームの八チマキをゲット！合計103
ポイント分の八チマキを獲得してトップになりましたっ」

「ひひひひひ、卑怯だ…。」

「あはは！勝てればええんや！勝てれば！！」

こうして、水中大運動会はまさかの結末を迎え終結した。

翌日の生徒会室、生徒会の男子メンバーは椅子に座り談笑していた。

「にしても、まさか柔道部が優勝とはなー。」

「まああの人は『反則王』の異名を持つからね。」

反則王…、決して誇れるものではないな。

その後も色々話していると突然ドアが開く。

「みんな遅れてすまない、少し用事があった。」

「……失礼します。」

確かあの女は競泳部の…、

「これから会計職を任せる喜界島同級生だ！競泳部からのレンタル

なので大切に扱うように！」

「荒稼ぎにきました。無駄遣いしてたら売り飛ばしますからそのつもりで！」

こうして生徒会メンバーに喜界島が加わった。

「しかし、誰もこの事をつっ込まんのだな。」

「もう突っ込んでも意味ないんだよ……。」

「そうか。」

善吉が諦めているので紅葉もそうする事にした。

第十三話、水中大運動会（後書き）

次回をお楽しみに！

第十四話、友達？（前書き）

ついにあの人が登場！

第十四話、友達？

＼紅葉side＼

「今日は米が安かったな。」

紅葉は現在アパートで一人暮らしをしており、今は買い物帰りである。

ふと、とある学校の前を通りかかろうとした時、

「ウアアアアアアア！！」

何だ今の叫び声は？学校の方から聞こえたが…。

「行ってみるか。」

紅葉は叫び声が聞こえた学校へと入っていく。

学校の校舎裏につくと多くの生徒や教師らしき人物が倒れこんでいた。不思議な事に全員の体に螺子が刺さっていた。

「何故螺子が…?」

「『あれー?』『まだいたのか』『もう!隠れてないで最初からいてよ』」

見た所によると手に螺子を持っている、返り血を浴びているな…。まさかコイツが?

「お前がやったのか?」

「『うん!』『ご名答!』『それで?君はどうするの』『』」

「何もする気はない、お前がどこで暴れようが俺には関係ない。」

「『アハハ!』『その通りだね』『……でもさ』『』」

そう言うと少年は紅葉の前まで瞬時に移動し螺子を振り上げる。

「『目撃者は潰さないとねっ』『じゃバイバイ』」

少年が螺子を紅葉の首に刺そうとするが、

「『？』『あれ？刺さらないや』」

「失せろ。」

紅葉は少年の顔面に右ストレートを放つ。歯が折れ鼻血を飛ばした少年はそのまま壁に吹き飛ばされて行った。

「……………」

死んだのか？少し強すぎたか……。

「『いてて……』 酷いなー』 あんな痛いパンチ初めてだよ』」

「生きていたか……。」

しかし、怪我を負っているハズが無傷でいるとは……。自然治癒能力があるのか？

「『それにしても』 何で君は僕の実力が効かないの？』」

「さあな、気がつくと思に付いていた。」

「『へえー……』 『そうだ！』 『友達になろうよ！』』」

「……お前と俺が？」

「『うん!』『どうかな!?』『」

NOに決まっているだろ…。というより、何故そこまで友達になり
たがる？

「『ねー良いじゃん』『」

「鬱陶しいぞ!-!」

引っ付いてくる少年をもう一度殴り飛ばし、その隙に紅葉は猛ダッ
シュで逃げる。

〈紅葉side out〉

〈?side〉

「『あーあ』『行っちゃった…』『」

少年はまたもや無傷でその場に立っていた。

「『殴りあってわかる』『これが男の友情か!』」

そうか!あの人はその事を教えてくれたのか!!

「『いやー』『今日はホントに良い日だった!』」

そう言つと少年、『球磨川楔』は自分が暴れた学校を跡にした。

第十四話 友達？（後書き）

次回は風紀委員かな？

第十五話、平和を守る者（前書き）

あの紅葉がまさかの！？

余談ですが、これとは違う小説を書こうしましたが時間がなく書けません（泣）

第十五話、平和を守る者

（紅葉side）

「校則違反ですー！」

「……うるさい……。」「

朝から何だ…、大体俺がいつ校則違反をした？

紅葉はただいま風紀委員を名乗る女子生徒に尋問されていた。

「何故あなたは胸元を開けているんですか。もしかして誘っている！？いやらしいー！」

「落ち着け。」「

別にそんなつもりで開けて訳ではないが…。まあ、これといった理由もないがな。

「服装の乱れは心の乱れです、よってあなたの心は乱れきっております！風紀委員会所属のこの鬼瀬針金の目が黒いうちは、あなたのような風体の生徒は一步たりとも校門を通らせませんよ！！」

そう言つと鬼瀬は、紅葉の目の前で大の字で行く手を阻んだ。

はあ……面倒だ……。仕方ない、ここは善吉から授かったアレを使うか。

そして紅葉は右手を上には振り上げ、指を天に向ける。

「あつ、UFOだ。」

「……………だから？」

効いてないぞ善吉よ……、しかも余計に怒らせてしまったようだ。

「あなたは人を舐めてんですか！もう絶対に許しません！！」

こうなれば最終手段だ。というより、最初からこれを使えば良かったのでは？

「じゃあな。」

『Escape』、これが紅葉の最終手段だった。

「ええっ！？ちよつ、待てー！！」

「仕事に励むんだな。」

紅葉は瞬時にその場から消え去り、鬼瀬を置き去りにした。

〈紅葉side out〉

〈鬼瀬side〉

「に、逃げられた…。」

何なんですかあの人は！？人を馬鹿にしているようにしか思えない！

「次はちゃんとした服装で来てくださいよ！！」

鬼瀬はその場で消えた紅葉に叫んだ。

「はぁ…、仕事に戻る。」

その時、鬼瀬は不快感を感じた。それは周りの人物が鬼瀬を見る目に。

「もう慣れたからいいや……。」

分かってる、風紀委員が快く思われていない事は。でも……でも……、

「何でも分かってくれないの…?」

鬼瀬は消えそうな声で呟いた。

「鬼瀬 side out」

「紅葉 side」

「よう桜島、さっきは大変だったな。」

「ああ。」

「えっ、桜島君何かあったの?」

「まあ…風紀委員とな。」

「ええ〜!風紀委員に捕まってたの!?可哀想〜。」

「ホントだよなー。」

この様子だと風紀委員は相当嫌われているらしいな。

「何故そこまで言うんだ？アイツらも仕事なのだろう。」

「まあ何ていうの？鬱陶しいんだよな。」

「そうそう！アンタら何様って感じだよね！！」

成る程な…、風紀委員の奴らも苦労しているのだな。

く自宅く

時刻は深夜を過ぎ、紅葉は床に就いていた。

『まあ何ていうの？鬱陶しいんだよな。』

『そうそう！アンタら何様って感じだよね！！』

「…下らん……。」

風紀委員の奴らも、良き学園にしようと努力しているだけだろうに……。

「寝るか……。」

まあ、俺には関係のない事だ。……明日はきちり着てやるとするか。

〈紅葉 side out〉

〈鬼瀬 side〉

「そこ校則違反です！」

「はいはい、直します。」

ふう…、今日も校則違反者は多いですね。頑張らなくては！

「よう。」

「あつ、あなたは！？」

この前の露出の人だ！またわたしを馬鹿にしに来たんですか！？

「……服装。」

「へ？」

「服装だ、校則には違反していないな？」

……確かに違反はしてませんね。でも、何故いきなり？

「おい、あれ。」

「うわ…、風紀委員だ。早く行こつぜ。」

……大丈夫、大丈夫。こんなのはもう慣れました。でもやっぱり…、

「…苦勞しているな。」

「……はい。」

やっぱり…悔しい……。

そう思っていると頬に何かが伝う。

「うう…、ヒッグ！…グス……。」

そっか、わたし泣いてるんだ。情けないなあ…。

「何故泣く？」

「エッグ…！く、悔しい…。理解っ…してもらえ…なくてっ…！！」

「……………」

何言ってんだろあたし…、無関係の人に愚痴言っちゃって…。

「泣くな、お前が泣いてどうする？」

「ヒッグ…、…………え…？」

「お前は学園の平和を守る為に自ら汚れ役を買ったのだろう？なら…こんな所で挫けるな。」

そつだ…。あたしはこの学園の平和を守りたくて風紀委員になったんだ。

「それと…俺は少なくとも理解しているつもりだ。」

「えっ……？」

そう言つと紅葉はその場から去るつとした。

「まっ、待ってください！」

「…何だ？」

「あの！よ、良かったら…わたしの……。」

沈黙が流れる。そして、

「師匠になつてくれませんか！？」

「……師匠？」

「はい!!」

この人の下ならもつと強くなれる！

〈鬼瀬side out〉

〈紅葉side〉

弱ったな…、こういうのは少し苦手だ。

「ダ、ダメですか…？」

鬼瀬が上目遣いをする。だが紅葉には全く通じず、

「弟子をとる気はない。」

「そこを何とか！お願いします!!」

すると鬼瀬は突然に土下座を شدした。

「土下座……。」

「これがわたしの精一杯の気持ちです!!」

まさかここまで本気とはな……。…仕方ないな……、

「分かった……。好きしろ。」

「ホントですか!?!やったあー!!」

「俺は桜島紅葉だ。お前は?」

「はい!わたしは鬼瀬針金といいます。よろしく願いします師匠
!」

まさか弟子をとる事になるとはな…、この学園は本当に変わり者が多いな。

しかしこの後、生徒会と風紀委員会との間に争いが起きる事を、まだ二人は知らない……。

第十五話、平和を守る者（後書き）

はい！彼女にはなりませんでした！！

まだ分かんないけど…。

第十六話、二つの正義（前書き）

数多くのご意見に感想ありがとうございます！！

他にもご意見がある方はどんどん言ってください。

第十六話、二つの正義

正義とは何か？

とある人物が悪人を殺し、人を救った。その人物は人々から『正義のヒーロー』と崇められた。

だがその人物は疑問を抱く。

『人を殺して人を救う。果たして、これが正義と言えるのか？』

その答えは誰にも分からない……………。

く鬼瀬 side く

「えっ…何コレ…………？」

「おっ！鬼瀬ちゃんじゃん。タオル持って来てくれたんだ、サンキ

ユ
ー
」

「あつ、は、はい……。」

ボロボロの教室の中に一人の男の子が立っており、傷だらけで倒れている生徒が大勢いた。

この男の子の名は『雲仙冥利』。あの十三組の十三人サーティン・パーティの一人であり、いわばモンスターチャイルドである。

一体何が起きたの？こんな小さい子にそんな力があるに思えないけど……。

「はあ、また血で汚れちゃったよ。で、何で黒神めだかがいるわけ？」

黒神さんいつの間に居たんですか……、全く気が付かなかった。

「オーケストラ部の事で投書があったのでな、それを解決しに来た。

「

「そうかい、でもオーケストラ部はこんな状態だからまともに話せねーよ。残念だったな。」

「その状態にしたのは雲仙二年生、あなただろう。もっと平和的に解決出来たハズだ。」

「甘えんだよ！話してわかるか！ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！それをなあなあにボカしちまったら、事情さえあれば許してもらえるつつって同じ事を繰り返すに決まってるーがよ！！やり過ぎなければ正義じゃねえ！それがオレのポリシーだ！！」

確かに委員長の言うことには一理あります。でも、師匠のように話せば分かってくれる人もいるハズ！！

「不正を正すことがオレ達の唯一の目的だ。暴力も武装もただの手段にすぎねえよ。勿論、黒神！テメーと敵対するつもりもテメー率いる生徒会と敵対するつもりも　　あるっ」

そう言うとき雲仙の手から何かが放たれめだかの額に直撃する。

「……？ おかしいな、今はただの挨拶代わりだぜ？ 見えねーまでもよける位の手加減はしたつもりだけど？」

「……………貴様から攻撃される理由が無い、故に避ける理由も無い。」

「へえ……………面白い事言っじゃん。もういっぺん同じ事言えたらベタ褒めしてやんよー!!」

そう言うと雲仙がまた手を動かす。すると、めだかは顎にアッパーを受けたような状態になった。

「ケケッ はい、終了了。」

「貴様から攻撃される理由が無い。故に、避ける理由が無い。言ってやったぞ？ 褒めるがよい。」

「……………素晴らしい。」

「や、止めてください。黒神さんの言う通り、話せば分かってくれる人はいます！今からでも遅くありません！考え直しましょう！！」

「んな奴いねーよ鬼瀬ちゃん。後、もう手遅れだよ。」

「えっ……？」

「黒神を除いた生徒会の4人に刺客を送っちゃった」

「よ、4人？」

「まさか！紅葉にも刺客を送ったのか！？」

え……？紅葉？まさか、まさか師匠！？

「そいつも生徒会補佐なんだろう？だったら良いじゃん。」

「っ！連絡しなくては！！」

めだかは慌てて生徒会のメンバーに連絡を取った。

「た、助けないと!」

「させねーよ鬼瀬ちゃん。」

助けに行こうとした鬼瀬の腹めがけ、雲仙がまた何かを放つ。

「ウグツツ!」

「何!? 貴様、仲間にも手を出すのか!」

「仕方ねーだろ、これも正義の為だ。……安心しな鬼瀬ちゃん、クビにはなんねーから」

し……師匠……、逃げ……て……ください……。

鬼瀬はそこで意識を手放した。

＼鬼瀬side out＼

＼紅葉side＼

「刺客？」

『ああ、今そっちに行く！』

紅葉は携帯電話でめだかと通話していた。

「助けはいらん、他の奴らのところに行け。」

『だが……！！』

「くどいぞ、……俺は大丈夫だ。」

『……分かった、無事を祈る。』

そこで通話が終わった。

刺客か、やってくれるな雲仙め……。だが、アイツを再起不能にすれば十三組の十三人の席が空く。
サード・パーティ

「恨みはないが潰させてもらうとするか。」

「待ちなさい。」

紅葉が雲仙の所に向かうおとしたが、日本刀を持った女子生徒に阻まれた。

「早速来たのか。」

「申し訳ありませんが、あなた方生徒会を肅清する命令が出ました。ですので……、」

日本刀を持った風紀委員が、鞘から刀をゆっくりと抜く。

「大人しくしてもらいます。」

「面白い…やってみろ！」

女子生徒が紅葉に斬り掛かった。

〈紅葉 side out〉

〈風紀委員 side〉

殺す気はない、当たり前だ。いくら命令でも殺しは絶対にしない。
でも……、

「あなたには半殺しの状態になってもらいます！！」

殺しはしないが『半』殺しはする。それがアタシの正義……。

「はぁあ！！」

風紀委員が紅葉に日本刀を振り下ろすが

『パシッ』

そんな音が似合うかのように、紅葉は日本刀を人差し指と中指で挟んで止めた。

「うそ!!??」

「ラァ!!」

紅葉のヒザ蹴りが風紀委員の鳩尾に入った。この時、紅葉は1000分の1の力で蹴ったのだが常人には耐え難い痛みだった。

「うぶっ……! ウエエエエエエ……ウツ……ガハッ!」

風紀委員は嘔吐物と吐き出した後、生涯で初めて吐血を体感した。

「もう終わりか？」

「ぐっ……、まだです……。」

「根性はあるな。だが、それだけでは勝てん。」

「黙れっつ……!!」

あり得ない！もう一度アイツに攻撃を！！

風紀委員は立ち直り紅葉の腹に日本刀を突いた。だが、

『パキーーーーン!!』

今度は日本刀の刃が木の枝が折れたかのように折れる。

「そんな!!」

風紀委員は悟った。ここにいる人物は常人では勝てる訳がないと。

「ちてと……。」

「あ……ああ……あ……。」

この時の風紀委員の脳と全細胞がこう叫んでいた。

『逃げる! 逃げる!! もし逃げなければ殺される!!!!』

「こ、殺さない……で……。お願い……助けて……!!」

まだ死にたくない! 生き残る為ならプライドなんか喜んで捨てるわ

！！

「……安心しろ、殺す気などない。」

「あ、ありがとう」だが、はじめはとってもらうぞ。「……！！？」

その時、一瞬わたしの両肩に風が通った。

すると、突然携帯電話が鳴り始めた。音は風紀委員のポケットからした。

風紀委員はポケットから携帯電話を取り出そうとしたが……、

「あれ……？動かない……？」

何で？疑問を晴らそうと肩を見ると

風紀委員の肩は、まるで人形のようにダラーンと垂れていた。紅葉は『人間ではまず感知する事は出来ないスピード』で、風紀委員の肩に手刀を入れ両肩を外したのだ。

「イ…イヤアアアアアアアアア！！！！」

風紀委員は今の両肩の状態に気付くと激痛が襲いかかり、やがて倒れ失神した。

「風紀委員 side out」

「紅葉 side」

「気絶したか…。」

まあ両肩が外れたのだ、そのショックと激痛で気を失うのは当然か。

ふと紅葉は、風紀委員の横にある倒れた拍子に出たであろう携帯電話が置いてあり、それが鳴っている事に気付く。

「まだ鳴っているのか…。」

仕方ない…、電話に出てコイツが話せない事を伝えるか。

「もしもし？」

「ったく…やっと出たくって、誰だお前は？」

「すまんが今この携帯の持ち主は電話に出る事は無理だ。」

「…そうか、しくじったのか。」

しくじった？この言い方だと風紀委員会の奴か。もしや…！？

「……雲仙冥利か？」

「…分かったぜ、十三組の奴らが言ってた転校生っていうのはお前だったのか。」

どうやら当たりのようだな…、そうと分かれば話は早い。

「雲仙、取引といこうか。」

「何だ…突然？」

「もし八つ裂きにされたくなければ大人しく十三組の十三人の席を
サ―ティン・パーティー
譲れ。譲らなければ…、」

「譲らなければ？」

「その時のお楽しみだ。」

そう言つと紅葉は電話を切る。

「行くか。」

そうだ、俺がフラスコ計画に参加しようとする理由は単に『面白そう』と思っただけではない。もっと……もっと大事なものの為だ。

紅葉は、本当の理由を胸に秘めながらその場を後にした。

第十六話、二つの正義（後書き）

もしFate/Zeroにめだかボックスの誰かが召喚されるとしたら鍋島だと思います。

だって『反則「王」』ですからね。……何かすいませんでした。

第十七話、真意（前書き）

何かすごいダラダラな文になった……。

第十七話、真意

（紅葉side）

「見つからん…。」

クソッ…、雲仙は何処にいるんだ？それらしい所は全て探したのだが……。

そんな事を思っていると、背後から怒鳴り声が聞こえた。

「天誅！！」

「ふん…。」

ヌンチャクを持った風紀委員が襲いかかるが、紅葉は回し蹴りで撃退する。

「ガッッ……………！！」

「おっと気絶されては困るぞ。」

せつかくだ、コイツから雲仙の居場所を聞き出すか。

そう考えた紅葉は風紀委員の腹に蹴りを入れ無理やり意識を戻させる。

「雲仙は今何処にいる？」

「はぁ……はぁ……、誰が……言うかよ……。」

「では無理やり吐かせるしかないな。」

紅葉は風紀委員の足を思い切り踏みつけた。

「アアアアアアア！！！！」

「折れてしまったのか？脆いな……。」

「ま、待ってくれ……！委員長のいる場所を教える！」

「良い子だ……。」

紅葉は笑顔になっていたが、その笑みが悪意に満ちていたのは一目瞭然であった。

「まさか生徒会室とはな。」

大將がわざわざ敵陣地に行つてどうする気だ？

「大方、めだかと戦う為だろうな。」

「うん、僕もそう思うよ。」

何だ？突然頭に聞いた事がある声が……。まさか……、

「安心院か？」

「よく分かったね。後、僕の事は親しみを込めて安心院あんしんいんと呼んでくれと何度言ったら分かるんだい？」

「気が向いたらな。何の用だ？」

「君と話がしたくてね。しかし大変だったよ、君の過負荷がOFFになる時をずっと待ってたんだよ？」

「そいつはご苦勞な事だな。……話がしたければ後にしろ。」

「分かった、楽しみにしているよ。じゃあね。」

……騒がしい女だ。さて、生徒会に行くとす「ドッゴオオオオン！……」……今度は何だ？

「待てよ……、今の音の方向は……。」

紅葉は高速とも言えるスピードで駆け出す。

「音の方向は間違いなく…生徒会室だ！」

「紅葉 side out」

「めだか side」

生徒会室、そこには紅葉を除くメンバーと雲仙がいた。

だが明らかに様子がおかしい。部屋の中は崩壊寸前で、髪を真っ白にしためだかとボロボロの雲仙がいた。

「どうした雲仙二年生！こんなものではないハズだ！！」

「ぐっ…、化けモンかよ……。」

「め、めだかちゃん……？」

何をやっているんだろうな私は……。みんな守る為とはいえ、これでは…一方的なリンチではないか。

「みんな……私の主義に巻き込んで悪かった。後で腕章を返してくれ。これからは……私一人でやっていく事にするよ。」

「「「!!??」」」

みんなを巻き込む訳にはいかない…、後は…私一人で。

「その必要はないぞ。」

「!?!この声は!!」

「紅葉!?!無事だったのか!」

「まあな。……それよりめだか、お前は大人しくしている。」

「えっ…?」

「わざわざお前が手を汚す必要はない。俺がやる。」

「なっ!?!」

何を言ってるんだ!?! 何故そんな事を!?!?

「せめて……せめてお前達だけは闇に染まらないでくれ……。」

「ど、どという意味なんだ?」

めだかが問おうとしたが、紅葉は雲仙を担ぎ上げて、

『ゴガアアアアン!!!』

紅葉は踵落として床を破壊して下へと降りた。

「っ、紅葉!!!」

「待てめだかちゃん!!」

「離せ! 離してくれ!!」

「落ち着けて! その怪我で無茶はダメだ!!」

「めだかさん、ここはいったん桜島君に任せよう。」

「お願い! 彼を信じてみようよ……。」

「……分かった。信じるよ。」

「良かった…。とりあえず怪我の治療を。」

紅葉……絶対に帰って来てくれ……。

めだかは善吉達に支えられながら生徒会室を後にした。

くめだかside outく

く紅葉sideく

「……それで良いか。」

そう言うつと、さっきまで走っていた紅葉は立ち止まり雲仙を乱暴に降ろす。

「いってえ……！……ったく何だよいきなり。」

「さっきの電話の通りだ。十三組の十三人サーティン・パーティーの席を空ける。」

「横暴だねえ……。まっ、この有様だ。文句なしで降ろされるだろーよ。」

「そうか。」

「……あのさー、一つ気になったんだけどよ。」

「……何だ？」

「さっきのあの言葉どついう意味なんだよ？」

さっきの言葉……、アレの事か。

『お前達だけは闇に染まらないでくれ』

「アレか……。」

「そうだよ。アレだよ。」

意味か、そんなのそのままの意味だ。

「アイツらにはそうなってほしくない、そう思ったただけだ。」

「……なんつーんだろ。お前が言ったら全然似合わないな。」

「黙れ、潰すぞ。」

雲仙にそう脅すと、紅葉はその場を後にした。

「本当に丸くなったな……。」

昔の自分ならまずあり得なかったな。

「……忘れよう、今大事なのはフラスコ計画の事だ。」

その言葉を漏らすと理事長室へと足を進めた……………。

第十七話、真意（後書き）

これで第一部は終わりです。

次回は紅葉と安心院がグタグタする回をやらうと思います。

閑話？、夫婦？（前書き）

この話は風紀委員会との戦いが終わり理事長室に行った後、自宅へ帰って来たお話です。

閑話？、夫婦？

（紅葉side）

「おや、おかえり。」

「……………」

何故安心院がいる……、しかもエプロン姿…訳が分からん。

「勝手にくつろいすまない。それにしても、君のベッドふかふかだね。」

「表に出ろ。」

ハッキリ言おう、俺はコイツが苦手だ。生きている中で初めてのタイプだからな。

「そう邪険に扱わないでくれ。ほら、君の為に夕食を作ったんだぞ

「？」

「勝手に食材を使つな。」

テーブルには作ったばかりであろう肉じゃがと大根の浅漬けと味噌汁と白飯が置いてあった。

「どうだ？ 旨そうに見えるだろう。」

「……毒は入つて入ってるわけないだろう。」……そうか。」

「ほら、早く食べよう。冷めちゃうじゃないか。」

「ああ……。」

確かに見た目は悪くないな……、

「じゃあ、いただきます！」

「…イタダキマス……。」

「うん、これは上出来だ。中々旨い。」

「……………確かに旨いな。」

「意外だね、君って人を褒めるんだね。」

「一々うるさいなコイツは、俺だって、あまり人を褒めるのは得意ではない。」

「しかし…、ご飯だけを作りに来た僕ってアレみたいだね。」

「何だ？」

「通い妻。」

その言葉を聞いた瞬間、口に運ぼうとした白飯を落とした。

通い妻だと？何を言ってるんだコイツは…………。

「このまま結婚するかい？」

「断る！！」

「冗談だよ、そんな全力で否定しないでくれ。」

本当に何を考えているか分からん奴だ…………。

その後二人は夕食を食べ終わり、テレビでニュース番組を見ていた。

「…………帰らんのか？」

「固い事を言わずに、ゆっくりしていきなよ。」

「家主は俺だぞ。」

もう好きにしろ……、段々疲れてきた……。

そう紅葉が諦めようとした時、

「……アメは甘めえ。」

安心院なじみ、まさかのオヤジギャグ。

〈紅葉side out〉

〈安心院side〉

そっういえば……、まだ彼を笑わせてないな。

そう安心院は紅葉に初めて会った日の後、紅葉を抱腹絶倒する事を誓っていたのだ。

（よし…、早速やるか。）

「…アメは甘めえ。」

まずは軽いジャブとしてオヤジギャグだ。

安心院は軽いジャブで放った。つもりだったが……、

「…フッ……。」

………えっ、笑った？軽いジャブで一発KOしたのかい！？

「今もしかしてわ」「笑ってない。」そうか……。」

怪しい…、確認の為に他のも言ってみるかな。

「怨念があるねん」

「!.....プッ.....。」

震えてるよ.....、まさかオヤジギャグが好きなのか？

「そろそろ帰れ、今日は疲れた。」

逃げたな...、まあ今日は許してやるとするか。

安心院はそう思い、アリバイブロック『腑罪証明』でいつもの場所に帰ろうとする。

「.....君って案外可愛い所あるんだね。」

「さっさと帰れ!..!」

これ以上イジメルのはやめとくか。.....また今度の楽しみに取って

おこつ。

安心院はそう考えると、その場から消え去った。

〈安心院 side out〉

〈紅葉 side〉

「……………」。

『アメが甘めえ』『怨念があるねん』

「やるではないか……」。

危つく笑いかけた。それにしても……、アイツは人を笑わせる事が上手いようだな。

「今度使ってみるか。」

スべるに決まっているのに、紅葉はあのオヤジギャグを活用する事を決めた。

閑話？、夫婦？（後書き）

睡魔と戦いながら書きました……。

次回から第二部です。

第十八話、十三組の戯れ（前書き）

何か古賀が出るとラブコメ風味になってしまう……。

第十八話、十三組の戯れ

〔紅葉side〕

「さて行くか。」

雲仙が十三組の十三人の席を譲ってくれた事を、紅葉は袴に報告しようとしたが、

サーティン・パーティー

「待ってください!!」

「ん?…アイツは……。」

「師匠!無事でしたか!?!」

声をかけた人物は、紅葉の愛弟子(?) 鬼瀬針金であった。

「ああ平気だ。」

「そうですか…良かったあ……、…っ……。」

「どうした？」

「あはは…ちょっと腹痛で……。」

ただの腹痛にしては辛そうだな……。

「鬼瀬、腹を見せろ。」

「えっ！ハ、ハレンチですよ！！／＼／」

「誤解するな…。怪我の具合を見るだけだ。」

「……よく怪我してるって分かりましたね。」

まああんな痛がり方をすれば気付くと思うが。

「と、とにかく見せれません！保健室に行つて来ます！！」

「分かった、……早く治すんだぞ。」

「はい……！」

鬼瀬は嬉しそうな顔で、パタパタと小走りで保健室へ向かった。

「……行くか。」

さっさと報告して帰るとするか、久しぶりに疲れた。

〈理事長室〉

「~~~~~という事だ。」

「成る程…、では改めて桜島君にはフラスコ計画に参加してもらいます。」

やっとだな……、長い道のりだった…。

「ところで黒神さんもフラスコ計画に参加させたいのですが……如何です？」

「参加させてみる…、その瞬間お前の四肢がバラバラだ。」

「…止めておきます。それにしても、何故そこまで黒神さん達に気を遣っているのですか？」

もしかしたら俺の計画に支障が出るかもしれんからな…。それに…
……、

「アイツらが闇に染まるのは気に喰わん……。」

「ほう……………」

少し喋り過ぎたか…、長居は無用だな。

「そうだ、せっかくだから他のメンバーに挨拶をしてはどうでしょうか？」

「気が向いたらな……………」

紅葉はそう言いながらも時計台へと向かって行った。

「紅葉 side out」

「古賀 side」

そこは時計台の一階、フラスコ計画参加者の高千穂・宗像・古賀・名瀬が輪を作るように座っていた。

「じゃあ…次は俺だ……………」

「うん……………」

高千穂が古賀にゆっくりと手を伸ばす。そして

「よっしゃあああ！3位だあ！！」

「うそ、また最下位だああ……………」

そう今この4人はババ抜きをしている最中だった。

「つか古賀ちゃん弱すぎだぜ…」

「これで十連敗ですね。」

「うう…………どうして勝てないんだろう…？」

「簡単だよ、お前には負ける気がしない。」

「全然理由になってない！」

せめて一勝はしたい！でも…勝てる気がしない……。

古賀がそんな風に絶望していると、

「何をしてるんだ？」

この声は…、まさか！？

「トランプをしているのか、全く幼稚な……。」

「こ、紅葉〜。」

「な、何だいきなり？」

メシアだ！神様があたしに救世主をお遣いくださった！！

く古賀side outく

く紅葉sideく

「実はかくしかじかで……。」

「成る程な。だからどうしてもババ抜きを勝ちたいと……。」

それにしても十連敗か…、もう才能が無いのではないか？

「というか古賀ちゃん、何でコイツを下の名前で呼ぶんだ？」

「そんなもん…コレだからに決まってるんだろ。」

すると高千穂がニヤニヤした顔で小指を立てた。

「な、なな、何やってんのおおおお！！！！／／／／」

「マジかよ古賀ちゃん!!」

「ち、違うよ!?!ただの気まぐれっていつか……。」

「青春ですね。」

「か、からかわないでください!」

「そう恥ずかしがるな、いたみ。」

「「「「!!??」」」」

啞然としている……、俺はただ、

「お前がメールで互いに名前呼び合おうと言ったではないか。」

「マジかよ……。」

「やるな古賀!!」

「うう……。」

また顔が赤い…、言わないでおくべきだったか？

「君は女心を理解した方が良いと思うよ？」

「……努力する。」

まだ勉強不足なのか、これでも多くの本を読み漁ったというのに…。

「と、とにかく！必勝法を教えて！」

「わ、分かった。」

必勝法とまではいかないが……、これで勝つ確率は上がるだろう。

「いいか？まずはな……。」

数分後、何と古賀が一位へと輝いた。

「やったあー！一位だー！！」

「やったな。」

「紅葉のおかげだよ、ありがとう！」

「俺はただ勝つ確率を教えたただけだ。」

、
そう紅葉はあくまで勝つ確率を上げただけである。その方法は

『大事なのは相手の表情を読み取る事だ。』

『表情？』

『ああ、人間の顔をよく観察すると表情のアクションで心理状態が分かる事がある。』

『そんな難しい事できるかな……？』

あんな事を言っていたが、やればできるではないか。

「じゃあな、楽しくやれよ。」

「えっ、もう行くの？どうせなら一緒やろっよ。」

「…ああ、構わんぞ。」

「よし決定！早速やる！」

どうにもコイツの頼みは断りきれんな。どうしたものか……。

その後、紅葉は何故か十連勝し周りからブーイングを受けてしまう

羽目になった。

第十八話、十三組の戯れ（後書き）

可能なら他の小説も書いてみようと思っています。

まだ書くとは決まっていますが、一応ご要望があれば教えてくださ
い。

第十九話、悲しき再会（前書き）

この前、鬼瀬の名前を『針金』と書いていました。正しくは『針音』です。

鬼瀬ファンの皆さんすいませんでしたm（――）m

第十九話、悲しき再会

（紅葉 side）

「黒神さん達が攻めて来ます。」

「そうか…では 死 ね。」

あれ程めだか達を巻き込むなと忠告したというのに…。不知火には悪いが、今日をお前の祖父の命日にしてやろう。

紅葉が拳を握りしめ姿勢を低くする。

「待ってください、私の所為ではありませんよ。」

「……誰が原因だ？」

「都城君ですよ。どうやら黒神さん達と接触したらしいです。」

あの王様気取りの奴か？余計な事をやってくれる…。

「今頃黒神さん達はこの計画を潰す準備をしているでしょう……。困りましたね…桜島君。」

コイツ……遠回しにめだか達を止めると言ってるな。

「俺の障害になるようなら止める。」

「そうですか……、それでは期待してますよ。」

「ふん……。」

止めるしかないな。俺の為にアイツらの為にも……。

「そういえば君の階は何故あんなに飾り気がないのですか？」

「……着飾るのはあまり好きじゃない。」

紅葉は雲仙がフラスコ計画を離脱したおかげで空いた11階を使っていた。

「話はそれだけだな？じゃあな。」

紅葉はめだか達を止めるべく時計台へと向かった。

〈紅葉side out〉

《都合により、高千穂・宗像・古賀・名瀬との戦いは省かせていただきます。》

〈善吉side〉

そこは時計台、生徒会メンバーは11階の扉の前にいた。

「……………」

「どうしたのだ善吉？浮かない顔して。」

「あつ…、いや何でもない。」

「……紅葉の事か。」

「…ああ……。」

あの日から紅葉は俺達に一度も顔を出していない…。何かあったのか……？

「紅葉なら大丈夫だろう、何せ生徒会補佐を努めているのだからな……。」

そう言うめだかであつたがどこか落ち着いていない様子だった。

「そつだな……！ここで弱気になったらアイツにぶん殴られちまうな……！」

「ふっ……そうだな。しかし、お姉様のあの言葉……一体どういう意味なのだ？」

『お前ら11階に行くつもりか？やめとけ……辛いだけだと思っぜ。』

『どういう意味です？』

『そのくらい自分で考えろ、……俺から言える事はそれだけだ。』

「だがフラスコ計画を潰す為には避けては通れぬ道だ……。みんな覚悟は出来てるな？」

「ああ、準備OKだ！」

「お供しますめだかさん。」

「あたしも!」

紅葉……、今無理だけど必ずお前を見つけるからな。

「では行くぞ……。」

めだかが扉を開けると11階の部屋の景色が目に入った。そこは、

一面真っ白な空間が広がっており、真ん中には椅子がポツンと一つだけ置いてあった。そこには……、

「来たか…………。」

「えっ…………お前は…!？」

嘘だろ…、…………何でだよ！何でいるんだよ！！

「何でお前がいるんだよ紅葉!!」

善吉の虚しい心の叫びが部屋中に響き渡った。

〈善吉 side out〉

〈紅葉 side〉

やはり良い気分ではないな…、コイツらを裏切ったようで…………。

「こ、紅葉…何故お前がいるのだ？」

「すまんめだが、俺にもやる事があるのでな。」

そうだ……俺はある『調べもの』があるからこの計画に参加した。

「お前達には悪いが……これから先は通さん。」

こうして紅葉はめだか達との悲しい再開を果たした……。

第十九話、悲しき再会（後書き）

違う小説を書いてみました。

良ければそちらも見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1448z/>

普通でありたい過負荷な異常者

2011年12月27日22時48分発行